

第二編 身延町の自然

奥之院よりの眺望



第二編 身延町の自然

第一章 地形と地質

身延町の自然は地形地質をはじめ、気象・動物・植物にいたるまで、大へん複雑でむずかしく、それだけに重要な場所となっている。特に地質や植物や鳥類については、多数の研究者が入って成果をあげているが、まだこれから調査しなければならないことが沢山ある。この章では身延町の地形と地質について述べる。

第一節 位置、面積および標高

身延町は山梨県の南部に位置し、ほぼ半円の形をしている。中央部を富士川が北から南へつらぬいて駿河湾にそそいでいる。総面積は一三〇・四七平方キロメートルでとなりの下部町とほぼ同じで、南につらなる南部町や富沢町より大きく、早川町にははるかに及ばないが、県下では第十二位である。

北方は急流早川を境に中富町に接し、東北方は下部町に、西部および北西部は南アルプスの前山である分水嶺を境に早川町に接する。南西部は安倍峠をへて静岡市梅ヶ島に接する。東方および南方は南部町に隣接する。

南北の距離は約一キロメートル、東西の幅は約一六キロメートルで、役場は本町のほぼ中央付近に位置し、東経一三八度二六分四八秒、北緯三二度二分〇三秒、標高一八二・九メートルをしめす。(表1参照)

表 1

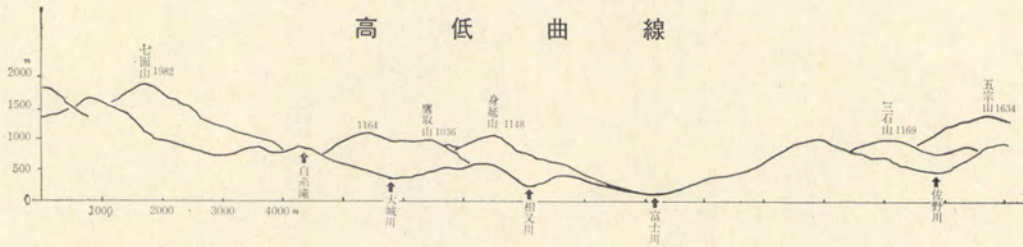
役 場 所 在 地	極 所 の 経 緯 度
南巨摩郡身延町梅平二四八三の三六	⑤五宗山 東経一三八度三一分
東経一三八度二六分四八秒	⑥八絛嶺 東経一三八度二〇分一八秒
北緯三二度二分〇三秒	⑦南部町境の山 北緯三五度一七分三二秒
標高一八二・九メートル	⑧小原島の早川河原 北緯三五度二六分

山岳地帯は富士川を軸として西側と東側に大きな壁をつらねている。西側に粟倉山、身延山、鷹取山、安倍峠などが南北にならび、更に西には本町での最高峰、七面山(一、九八二メートル)がそびえている。東側にも入ヶ岳、五宗山、三石山、大島峠などが南北にならび最高峰は五宗山の一、六三四メートルである。

面積の大部分は急峻な山岳地帯によって占められ、深い谷が刻まれ、これらの谷間の水は集まってことごとく富士川に注いでいる。

山林面積は本町総面積の約八四パーセントを占め、原野五パーセント、耕地四パーセント、その他七パーセントの割合となっている。山林面積の七七パーセントは民有地であり、耕地の約九〇パーセントが田畑をしめている。

標高別に面積をみると五〇〇メートル以上が本町総面積の五四・五パー



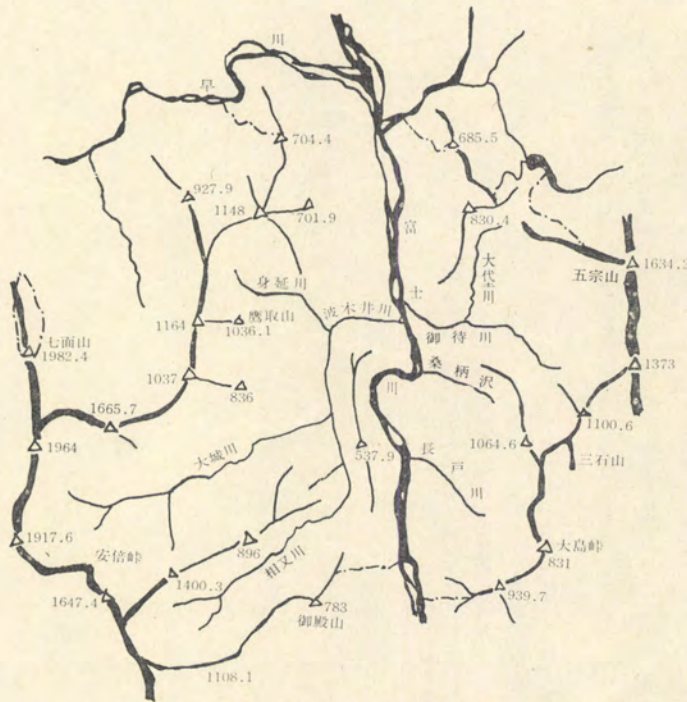
セントを示している。二〇〇〇メートルは三九・五パーセントを示し、五〇〇〇メートルの約六パーセントの土地のほとんどは未開拓または開拓不能の河川敷であり、集落や田畑のすべては一五〇〇〜五〇〇メートルまでの河川がつくった扇状地、河岸段丘や河原などに点在している。

第二節 地形の概要

本町は西に身延山（一、一四八メートル）、鷹取山（一、〇三六メートル）、七面山（一、九八二メートル）さらに八紘嶺といわれる一五〇〇メートル以上の山々がつらなり、早川町や静岡県と境を接しており、東に傾斜はゆるく土地も広く富士川に没している。南は御殿山（七八三メートル）および安倍峠（一、四四一メートル）により南部町に接している。それらの支脈の間をぬい、相又川・大城川・身延川・波木井川などの各河川が流れ、富士川にそそいでいる。

この地域の特徴は何といっても断層地形で、断層崖や段丘地形が各所にみられる。下山から奥の院、久遠寺の東をむすぶところに比較的大きい断層層があり、大きな断層崖を富士川に向けている。その下のゆるやかな傾斜の山腹には杉山や塩沢等の部落が存在している。この断層線はさらに南にのび相又川の谷をつくっている。

相又川は谷が最も長く、断層崖もみられる。また段丘もみられ、その上に耕地や集落が発達しており、さらに南下し、榎の木トンネル付近で南西向きをかえている



身延町の地形略図

が断層谷の様相を呈している。大城川にも随所に段丘地形がみられ、流路を南西方向にとり、相又川と合している。身延川、波木井川は北に山を負い地域的には暖かいところであり、植物の分布の点からみて暖地性の植物の北限のものが多し。富士川東部は、五宗山や三石山を一連とする毛無山系の山地が地塊的に分立し、富士川沿岸に急斜面をむけ、急峻な山地が多く、岩石が露出しており、わずかに一部、山地のふところの傾斜地に集落が点在しているのみで土地もせまい。

身延町の地形略図



位置図



身延町

南巨摩郡身延町 位置図



1 : 50,000

メートル 1000 500 0 1000 2000 3000 4000

東西方向に流路をとる御持川、桑柄沢をはじめ大小多くの河川により、これらの地層は解析され、富士川にそそいでいるが、起伏のはげしい地形である。

中央部を富士川が南北方向に流路をとり、随所に河岸段丘が見られ、耕地や集落として発達し人口密度も高く、国道五十二号線や国鉄身延線などの交通網も発達し、産業、文化の中核となっている。この身延山を中心とした概況を身延山御書類聚、妙方尼御前御書には

「北は身延山と申して天にほし立、南は鷹取と申して鷄足山の如し。西はなないたがれと申して鉄門に似たり。東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり。四の山は屏風の如し。北に大河あり早河と名く。早き事箭を射るが如し。南に河あり、波木井河を名く。大石を木葉の如く流す。東に富士河、北より南へ流れたり。千の銚をつくが如し。内に滝あり身延の滝と申す。白布を天より引くが如し。……」

とのべている。

耕地は標高一五〇メートル付近にひらけ、水田は各河川の扇状地および富士川の流域の周辺に点在している。畑は傾斜をなして、山林につらなっている。

第三節 地 質

一、地質分布概観

身延町の地質で特記すべきは何といっても、ホッサマガナ（大地溝帯）と糸魚川―静岡構造線であるがまず富士川の東側には毛無山系の五宗山・三石山などの一、〇〇〇メートル以上の山なみがつづき、一段低く七〇〇〜八〇〇メートルの山地が地塊的に分立し、さらに高度をさげ富士川に没

している。

この地域一帯のほとんどは静岡層群といわれほぼ南北の方向に延び、礫岩を主体とし砂岩・泥岩などから構成されている。礫岩は硬質であるので富士川に急斜面をむけ特異な急しゅんな地形をつくっている。御持川（椿川）の原流地、五宗山付近は閃緑岩、石英閃緑岩が貫入しており南部町方面にも分布している。大部分は礫岩からなるが、貫入岩のため熱変成をうけ、岩質もかく急崖を呈している。それらの地塊を横断して御持川、桑柄沢をはじめ、多くの河川が東西の方向に流路をとり、富士川に合流している。

東部山地と対称的に西側に楡形山層といわれる身延山・鷹取山など一、〇〇〇メートル以上の山地がそびえ、その東側は断層により急斜面で富士川沿岸の丘陵地帯に達し断層崖の地形を示している。この断層崖は北方では中富町富士見山の東側斜面を南に延び、早川よりさらに身延町粟倉西部より杉山部落、清住町、相又川にそい櫃の木トンネルをとる逆断層によるもので、清住町南方の寺平や久遠寺の台地などはこの断層運動によって生じたコブ状の台地であると思われる。

身延山の東部から清住町を経て相又川にそい櫃の木トンネル、横根、南部町北原を結ぶ断層を北部では富川見山断層、南部を櫃の木断層とよんでいる。この断層線より東部を静岡層、西部を楡形山層とよんでいるが、静岡層は身延町内では広範囲で富士川の西岸部に分布している。この静岡層と西八代層の層位関係について、いろいろの研究が発表されているが、整合状態から、ほぼ同時代のものであるとされている。

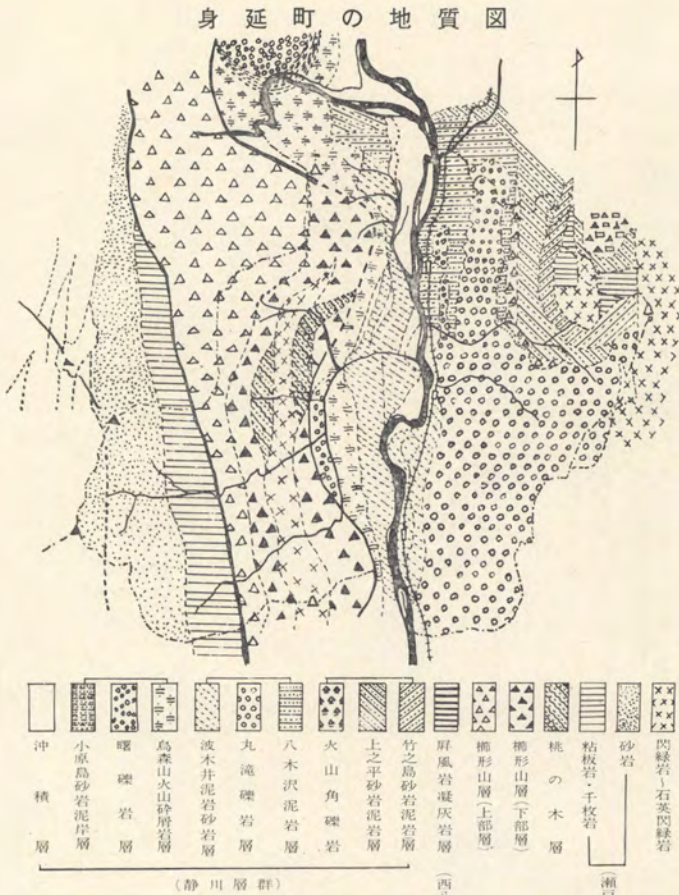
身延山の西側は、いわゆる糸魚川―静岡構造線と称する一大断層線によって西方の七面山、安倍峠、その他一、〇〇〇メートル以上の山なみを構成している山地を、中生層と呼んでいる。この構造線にそって早川や支流の春木川が流れ角瀬付近で流向を東に転じ飯富付近で富士川に合流している。春木川は断層谷で、白糸滝付近は楡形山層に属している。

二、大地溝帯と糸魚川—静岡構造線

糸魚川—静岡構造線は日本列島をほとんど中央部において横断し、日本列島を東北日本と西南日本の二つに区分するもので、日本の地質図を大観すると、だれでもその存在に気がつくことができる。

構造線とは断層線の一つでその断層を境として両側の地質構造がまったく異なる場合に構造線といわれている。

この糸魚川—静岡構造線を西縁とし、関東山地を東縁としてできた大



凹地が大地溝帯(ホッサマグナ)といわれ、明治二十年(一八八七)頃、ドイツ人ナウマンによって命名されたものである。このような地域は地殻の弱所であるから地球内部の平衡運動によって一大運動が起るのも当然のことと、この凹地帯のできた直後にはこの地方はまだ海水におおわれていた。ここに海底火山活動が各地におこり、さかんに噴出物を周辺に堆積し、土地の隆起によって地溝帯の各所に山地を構成するに至った。それが現在の御坂山地であり、富士川の両側山地、釜無川西辺の山地である。これは地質時代でいうと今から三、〇〇〇万年以前のことであり、その後も地殻の変動により隆起、沈降、浸食堆積、しゅう曲、火成岩の侵入、火山の噴出などを繰り返して今日のような地形ができあがったのである。

ホッサマグナの西縁をなす糸魚川—静岡構造線は北より、新潟県の糸魚川、長野県の大町、松本盆地、塩尻、諏訪盆地、本県に入り、甲府盆地の西部から南巨摩郡の西部をとおり、静岡市におよぶ線である。本地域における糸魚川—静岡構造線は早川谷を南下し春木川を経て大城川の古城間を通過し、相又川上流から戸栗川上流、折付—音下間を通過し、剣抜の南方から富沢町を経て静岡に達している。井尻博士は大城—古谷城間において西方の古期砂岩頁岩層が、東方の橄欖石玄武岩と逆断層(走高北一〇度西、傾斜八〇度西)で接触する露頭を観察している。また南部町戸栗川上流の折付—音下間において大体同様な岩相の関係において断層面(走高北三〇度西、傾斜六五度北西)を認めている。その大城川を横ぎる場所は、大城川の上流、赤岩橋の上流三〇〇メートル位の地点の左岸にみとめられた。赤岩橋付近は、檜形山層の橄欖石、普通輝石、玄武岩で断層粘土をはさみ、西側の瀬戸川層の砂岩や頁岩は珪化し、千枚岩化しているのでよくわかる。最近この付近は砂防工事のため、接触のようすを観察することができなくなったのは残念であるが、断層鏡肌のついた橄欖

玄武岩などが、現場付近にみられるのがせめてものなぐさめである。

三、各地層の詳説

(一) 瀬戸川層群

南北方向に流れる春木川を通る糸魚川―静岡構造線の西側にある地層を瀬戸川層群とよんでいる。身延町の飛地である七面山を構成する地層を、瀬戸川層の角瀬砂岩層とよんでいる。

ア、角瀬砂岩層

この層は七面山の東と西の斜面に広く分布している。特に角瀬付近に露出する岩石を、代表して角瀬砂岩質と名づけられ、七面山塊を構成するのはほとんどこの砂岩である。おもに淡灰色の硬質塊状の砂岩からなり、ところどころに粘板岩のくはさみくをもっている。七面山の裏参道角瀬付近の礫はこの岩石である。山頂付近は粘板岩・千枚岩・砂岩などの互層からなり、走向はほぼ南北方向で春木川を境に東側の楡形山層に逆断層の形で衝上している。春木川にその断層崖の急斜面を示している。春木川付近はおもに黒色粘板岩、千枚岩質粘板岩であり、白糸滝付近は楡形山層のものである。

大城川上流、赤岩橋付近より西側は走向北一〇度西、傾斜西八〇度九〇度で砂岩、頁岩の互層からなり、古谷城下方の大城川岸ではよくこの状況が観察される。古谷城の上方では粘板岩の露出がみられ、節理が著しく発達し、千枚岩化し、地質はきわめて脆弱ぜいじやくとなっている。

相又川上流の瀬戸川層中には、多数貫入岩床として玄武岩がみられることは注目すべきことである。このことは、糸魚川―静岡構造線は現在の小断層の存在にかかわらず、かつて火成岩（玄武岩）の貫入関係にあったことを明らかに示すものである。以上のほかこの玄武岩中に相当広範囲に瀬戸川層の捕獲岩が存在している。大きな岩塊の一部は頁岩で一部は玄武岩

であることがしばしば観察される。

(二) 新第三紀層群

ア、桃の木層（中山層）および楡形山層

桃の木層は中巨摩郡桃の木鉱泉付近を中心に南北に分布し、おもに砂岩・頁岩・礫岩よりなる地層に命名されたものであり、楡形山層は、中巨摩郡西部の楡形山付近の地層によって代表されるもので、おもに安山岩や、凝灰角礫岩のような火成岩よりなり、身延山や、鷹取山などの山なみを構成している。早川以南に幅広く分布し、さらに南部町方面にも延びて分布している。桃の木層は早川以南への分布がはっきりしていなかったが、最近では身延町以南にも分布していることが認められてきた。

久遠寺付近に分布している頁岩は層位上から桃の木層に属するものと考えられる。

久遠寺黒色頁岩（桃の木層）

久遠寺の河床に露出している代表されるもので、女坂付近にも露頭がみられる。南方へ分布し、小田船原西方の大倉沢に広く露出している。黒色緻密ちみつのやや珪質の頁岩であるが石英閃緑岩く閃緑玢岩などの貫入の影響をうけホルンフェルス化している。

イ、楡形山層下部層

中富町富士見山嶺および身延山、鷹取山一帯に分布している。身延町内では、身延山東山腹で烏森山火山砕屑岩層と逆断層で接している。身延町元町付近から身延川に沿って露出する安山岩、角閃玢岩等の火成岩類や凝灰岩、凝灰角礫岩等の火成砕屑岩がみられる。洗心洞付近から追分に通ずる参道にそって、石英斑岩、玢岩類が露出し、わずかに凝灰岩・砂岩・頁岩をはさんでいる。洗心洞付近では暗緑色頁岩に閃緑玢岩の貫入がみられ、接触部の頁岩は変成作用をうけてホルンフェルス化し硬く浸食に抵抗し、地形上も身延川に突出している。

高座石付近では閃緑玢岩、角閃玢岩が相接して露出するが、いずれも頁

岩をつらぬく半深成岩体で、これらの半深成岩体は不規則な節理面に滲透する地下水により汚染され、一部は粘土物質になっているところもみられる。なお一部には黄鉄鉱を^{胚胎}している。

高座石付近から願満堂、願満大社を経て追分に通ずる参道にそって、角閃玢岩・集塊岩・安山岩などが相接して露出するが、それらの境界はあきらかでない。また願満大社から追分に通ずる参道では、緑色凝灰角礫岩、緑色凝灰岩からなる楯形山下部緑色相の上に黒色相の黒色凝灰岩、黒色凝灰角礫岩、黒色火山礫凝灰岩などの上部層が整合にのっている。この付近は変質も著しく、方解石や沸石類の白色脈やべにが脈もみられる。なお追分から奥の院に通ずる参道にそって安山岩が露出し、山頂には角閃玢岩の破片が多く存在している。また高座石付近にみられる閃緑玢岩、石英閃緑岩類は南へのび、鷹取山地区で大倉沢上流で頁岩に小規模な支脈として進入し、さらに大城川の門野、大城間にも分布し、相又川を横ぎり御殿山方面にも分布している。

ウ、楯形山層上部層

春木川東部に带状に広く分布している。ことに早川横谷部から南方の追分にかけて著しい。おもに層理に乏しい黒色凝灰角礫岩よりなり、その他、黒色凝灰岩・黒色火山礫凝灰岩も多く、ところどころに黒色頁岩のレンズをはさんでいる。

追分付近を西に進むと石英閃緑岩の脈岩が変質され着色された露頭がみられるが、それをすぎると十萬部の西に砂岩・頁岩の互層するところに断層線が落差一メートル内外で数か所にみられる。

(三) 静川層群

中富町静川一带に分布する地層を代表して静川層群とよんでいる。楯形山層群と西八代層群とはさまれており、その下部は砂岩・泥岩などからなり上部は礫岩からなり、複雑な様相を示している。これらの地層についての概略を説明する。

ア、八木沢泥岩層

波高島から富士川沿岸ぞいに南に分布する。八木沢付近の富士川河崖に露出する地層から八木沢泥岩層、または鰐原泥岩層ともよんでいる。北部では東—西性走向をもち、南へいくにしたがって北—南性走向になっている。この層はおもに暗灰色の泥岩からなり、南方にいくほど砂岩や細礫岩がはさまれてくる。また、この地層から小型有孔虫の化石や植物の化石も発見されている。下八木沢—帯金間の身延線トンネル上には、この八木沢泥岩層の上部層にあたる淡褐色凝灰質泥岩がはさまれている。また、上八木沢にはこの部層中に幅二メートルの粗粘玄武岩の岩床があり、周囲の泥岩は変質され硬質緻密なホルンフェルス状の岩石もみられる。下山の北沢・大沢にはこの部層の上部に分級度の低い礫岩などがみられる。さらに、この地点の北部に上の平砂岩泥岩層が分布し、走向東—西性で厚さ五センチメートル内外の灰色砂岩と黒色泥岩との規則正しく美しい互層が早川河底にみられる。

イ、丸滝礫岩層

この層は北は下部町川向付近に発し、幅一〜二キロメートルで南方にのび、塩之沢付近では東方天子山脈までの間、幅約六キロメートルでさらに南部へ広く分布している。旧大河内村一体に分布しているので大河内礫岩層ともよんでいる。おもに礫岩からなり、砂岩や泥岩の薄層をはさんでいる。礫の構成は黒色硬質頁岩、砂岩、チャートおよびこれらのホルンフェ



丸滝礫岩層

ルスなどの円礫で、塩之沢と榛草里の中間部にはそれ以外に玢岩や安山岩の角、亜角礫を混入している。礫の大きさは大きいもので径二〇センチメートル、一般には一〇〜一五センチメートルのものが多く、塩之沢付近では径五〜一〇センチ内外のもの、榛草里付近は二〜三センチ内外のものと東部にすすむほど小さくなっている。この礫石は硬質であるため急峻な地形をなしている。

しかし、下八木沢―塩之沢間の礫岩は丸滝礫岩層とはいちじるしく異なり、層理に乏しく、軟弱で礫も淘汰悪く雑然としている。また、礫種は上記のもの以外に、丸滝礫岩のものと思われる礫や、八木沢泥岩層のものと思われる泥岩などの円礫を含んでいる。さらに、塩之沢北方一キロメートル地点では、この礫岩中に上記泥岩円礫のほかに花崗岩礫も混じり、八木沢泥岩に不整合で接している。この軟弱な礫岩層は丸滝礫岩層の上位層と考えられ、中富町曙一带に分布する曙礫岩層に相当するものではないかといわれている。

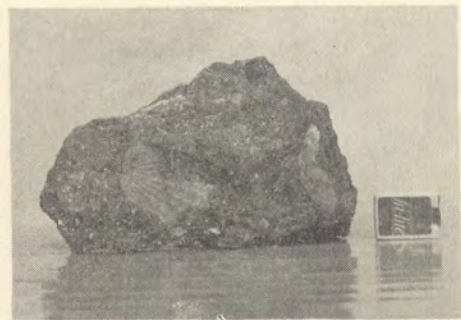
丸滝礫岩層は、榛草里部落では追跡できないが、大崩部落の東部山嶺地域では石英閃緑岩の影響をうけて、ホルンフェルス化している。この地域の石英閃緑岩は、南部方面に分布している。

ウ、波木井泥岩層

北は下山にはじまり、波木井・大野方面から、さらに南部へ分布しており、泥岩と砂岩の互層であるが、岩相は変化に富み、砂岩が粗粒になったり礫岩になったり、また径一五センチ



波木井坂付近の露頭



船原地内の波木井川右岸で発見される化石



小原島砂岩泥層と岩その化石の一部

メートル位の円礫を泥岩中に多数ふくむ層もある。特に粒径変化の点で特徴のある層である。波木井泥岩層の硬質泥岩中からは、有孔虫の化石が豊富に産する。

総門付近より東側にかけて、灰色〜黄褐色の層理の明瞭な砂岩が、波木井川河岸にはほ南北の走向で、傾斜垂直に近い地層が分布している。

塩之沢付近に入ると、砂岩と泥岩の互層で泥岩がちの地層である。この泥岩は青灰色を帯び風化して細かく割れる。化石を含み部分的には浮石質になっている所もある。波木井坂の西で、この層の上部に厚さ五メートルの海緑岩砂岩がみられるが、あまり連続していないようである。

その東側、波木井橋付近までは波木井坂南の沢沿いの露頭で代表する地層であり、砂岩と泥岩との互層で境ははっきりしており、波木井橋付近では約三〇メートルの礫岩質砂岩をはさんでいる。

エ、烏森山火山砕屑礫岩層

中富町早川橋から観音橋に至る道路沿いの露頭に命名された地質で岩相変化に富み、おもに複輝石安山岩質の火山角礫岩・凝灰角礫岩・凝灰岩・凝灰質砂岩および泥岩などからなり、特に凝灰質砂岩や泥岩は古屋敷付近から南にしたいに厚くなる。身延地区元町付近に角礫安山岩・輝石安山岩・溶岩などの火成岩を角礫にもつ暗灰色〜暗褐色の凝灰角礫岩の露頭がみられ、さらに南にのび梅平付近の山地・北清子・大久保付近の山地を構成している。古屋敷の沢には淡緑色軽石質（石英安山岩質）凝灰岩がはさまれており、杉山の北の当子沢には沸石、方解石の杏仁粒を含む玄武岩の火山角礫岩が露出している。

オ、小原島砂岩泥岩層（静川砂岩層）

小原島の道路沿いの露頭を小原島砂岩泥岩層とよんでいる。岩相の変化にきわめて富み、対岸の遅沢方面に舟底形に分布している。主として粗中粒の暗灰色凝灰質砂岩から構成されている。小原島付近では径五〜一〇ミリメートルの礫岩を含む礫岩質の砂岩で、特に砂岩層から海棲貝化石のホタテガイ・アサリ・シジミ・カキ・ハマグリ・ヤスリツノガイ・フジツボ・サンゴなど二十数種が報告されている。

カ、曙礫岩層

相又川の小田船原付近や大城口・豊岡の学校南・さらに南部町城山付近などに細く曙礫岩層の小露出がみられる。曙礫岩層は中富町曙一帯の標準露出に命名された礫岩層で砂岩の薄層をはさんでいる。礫は径二〇センチメートル以下の円礫で、礫種は硬砂岩・頁岩・粘板岩・それらのホルンフェルスで、その他に、御坂層起源のものと思われる閃雲花崗岩、石英閃緑岩、玢岩なども含んでいる。礫間は、灰白色の粗中粗砂でみだされ凝固度はひくく、下八木沢―塩之沢間の富士川付近の礫岩と酷似しているので、同時代の堆積物ではないかと思われるが、今後の研究にまきたい。

四、第四紀層

(一) 洪積層

ア、段丘堆積物

段丘堆積物は富士川・早川・波木井川などの諸河川およびその支流の河岸付近に大小数多く点在している。構成物は礫および砂よりなり粘土を表土としており、農耕地や住居として多くの住民の生活の基盤となっている。



河岸段丘の遠望（富山橋より）

この段丘を分類すると、高位段丘―現河床から三〇メートル以上の高所にわずかに堆積物を残して存在する。

中位段丘―現河床から七〜八メートル以上の高所にやや明瞭に形態を残して存在する。

低位段丘―現河床から二メートル以上の高所にほぼその現形を残している。

この高、中、低の三段丘にあたる地域例をあげれば、波木井古屋敷などは高位段丘であり、大城、湯平、波木井坂などは中位段丘としてあげられ、低位段丘は下山、波木井、梅

平、帯金など数多くあげられる。

特に梅平、鏡円坊付近の段丘は三段階のようすがよく残っており段丘の典型的なものである。

(二) 沖積層

富士川・早川・波木井川およびその支流沿岸には沖積地が発達し、ほと

んど、上流より押し込まれた砂礫層よりなり、多くは農耕地として利用されている。下山―身延にかけて富士川は沖積砂礫層がきわめてよく発達し、径三センチメートル内外の礫が豊富にあるために砂利採取がさかんである。



五、鉱物資源

(一) 珪藻土

七面山頂の池は東西にせまく敬慎院の平坦地であり、通常一の池と呼んでいる。背後(西方)に二〇〇〜三〇〇メートルの急斜面をもって山稜がつづいている。池には灰白色土状物質が化石状に堆積した珪藻土^{ケイ藻土}があり、現在も無数の珪藻が生息浮遊してさかんに堆積土をつくりつつある。池底には一メートル内外の堆積土をつくり、その上層部では半化石の珪藻類、水中に生活する珪藻類が順序よくみられる。

珪藻類の種類をあげてみると、フラシラリヤ・ジャトマ・ナビィキラ・メラシラ・エセセミヤ・シネドラなどがあげられる。この珪藻土を乾燥させたものが「お土」である。

(二) 沸石

大城付近の凝灰岩中にはいちじるしく杏仁状沸石、または沸石の薄い脈がところどころ横ぎっているのがみられる。奥川橋付近にすばらしい露頭がみられる。この成因については、凝灰岩結成のさい、輝緑岩や武岩質の火成岩の侵入にあい変質のさい、さかんにガスを放出し岩石に多くの気孔を生じ、一方には方解石の沸石化作用をおこし、この現象を呈したものとされる。相又川流域にもみられ、楡形山層の下部層にこの現象が多いといわれている。

(三) 銅 鉱 床

榎の木トンネルの南の県道わきに銅鉱床があり採鉱されたが、現在は廃坑になっている。この鉱石は黒―灰色の輝銅鉱と緑色の孔雀石で、輝銅鉱は鉱物としては非常に珍しく美しい結晶面をもっている。大久保部落にも鉱床があり、現在採鉱している。

湯平には金鉱を掘ったといわれる廃坑がみられるが、おそらく段丘地形の中における砂金の採鉱跡であろう。

第四節 土 壌

一、土 壌

土壌の大部分は岩石の分解物からなっている。したがって母岩の種類と、母岩が風化分解をうけるさいに分離する岩石の化学成分が、重要な働きをもっているわけである。身延町の母岩の分布については地質の項で記しておいたが、瀬戸川層群は頁岩、砂岩、粘板岩、珪化された礫岩などが

らなり、主に千枚化された頁岩や砂岩である。櫛形山層群は砂岩・粘板岩・凝灰岩・安山岩・玄岩など、主に火山噴出物を主体とした火成岩や凝灰岩や集塊岩であり、西八代層、静川層は頁岩・砂岩・火山堆積岩・礫岩などで、主に砂岩・頁岩である。これらの岩石の風化分解をうけ、生成された土壌は砂質壤土が大部分で一部に粘質壤土もみられる。

二、土壌と林業・農業との関係

森林は、自然に放置生育している現状であるので母岩の鉱物成分化と森林生育の主要な要素となっている。

安山岩が風化分解をうけて生成された安山岩質土壌は、植質の土壌をつくりやすく、その多くは火山灰質土壌のように重粘であって、保水力もかなり強い。

石英閃緑岩は酸性土壌をつくりやすく、粘重な土壌をつくりやすいといわれている。

一般に花崗岩などの酸性岩の風化土壌ではスギ・ヒノキの生育は不良で、耐酸性の強いアカマツの生育は良好である。閃緑岩・玢岩・安山岩などの中性岩の風化土壌である方がスギの立地として優れ、さらに玄武岩、輝緑岩などの塩基性岩となるほど立地的価値は高く、また、堆積岩の場合でも粘土質の岩石ほど立地的価値が高く、珪質の岩石ほど立地的価値が低いといわれている。

この母岩の条件とともに気象的条件・地形・地下水・および土壌湿度などの関係を軽視することはできない。

このような見地から身延町の造林について一考すると、母岩が主として火山噴出物を主体として、火成岩、凝灰岩や集塊岩・頁岩・砂岩であるので風化土壌としては、中性土壌、塩基性の粘質な土壌ということになる。したがって、土地の立地条件としてはスギ、ヒノキの適地といえよう。それに気象的条件・地下水・土壌湿度を加味して考えると、和田、波木井川

以南の多雨地帯としての造林地の現状はうなずけるし、さらに今後の分析的研究のもとに造林育成を考えるべきであろう。

造林のみでなく、土地の立地条件・湿度・気温などと農業の関係を科学的に研究をすすめる、適地適作の効率の高い農業計画が立てられなくてはならない。

三、地すべり

地すべりは瀬戸川層地域には多いが新第三紀の分布地域には比較的少ないといわれている。

一般に地すべりは、地層の傾斜と山腹斜面の傾斜が一致している地帯や地層の軟弱な地帯に多い。

身延町各地は断層などの破碎帯にそい、小褶曲や小断層がさらに発達し、裂目が生じ風化・粘土化し岩体の破碎が特に著しい地帯に地下水・地上水の要素などが加わって地すべりがおきる場合が多く、火山破碎岩からなるところの崩壊では、大きい岩塊が転落し、押し出されるから局部的な人畜災害もおこす可能性が大である。泥岩地域では泥岩は径一ミリメートル位に細かくわれ、徐々に崩壊、軟弱のため豪雨時には一時に押し出される。国鉄身延線や国道五十二号線がしばしば不通になるのは、この泥岩露出箇所が多い。

横根付近も地すべりが多いが、この付近は曹長石化作用をうけた玄武岩質凝灰岩からできているので変質が著しく脆くてこわれ易い。大きな断層（榎の木断層）がこの付近を通っており、これにより小断層や裂目を生じ、崩れやすい岩石や粘土に地下水の要素が更に加わり、地すべりや山すべりの原因になっている。

第五節 水 系

本町の中央部を富士川がほぼ南北方向に流れ川幅が広く、早川との合流点は約一、〇〇〇メートルの川幅をもっている。この富士川に数多くの川や沢が東西の方向に流路をとり流れこんでいる。

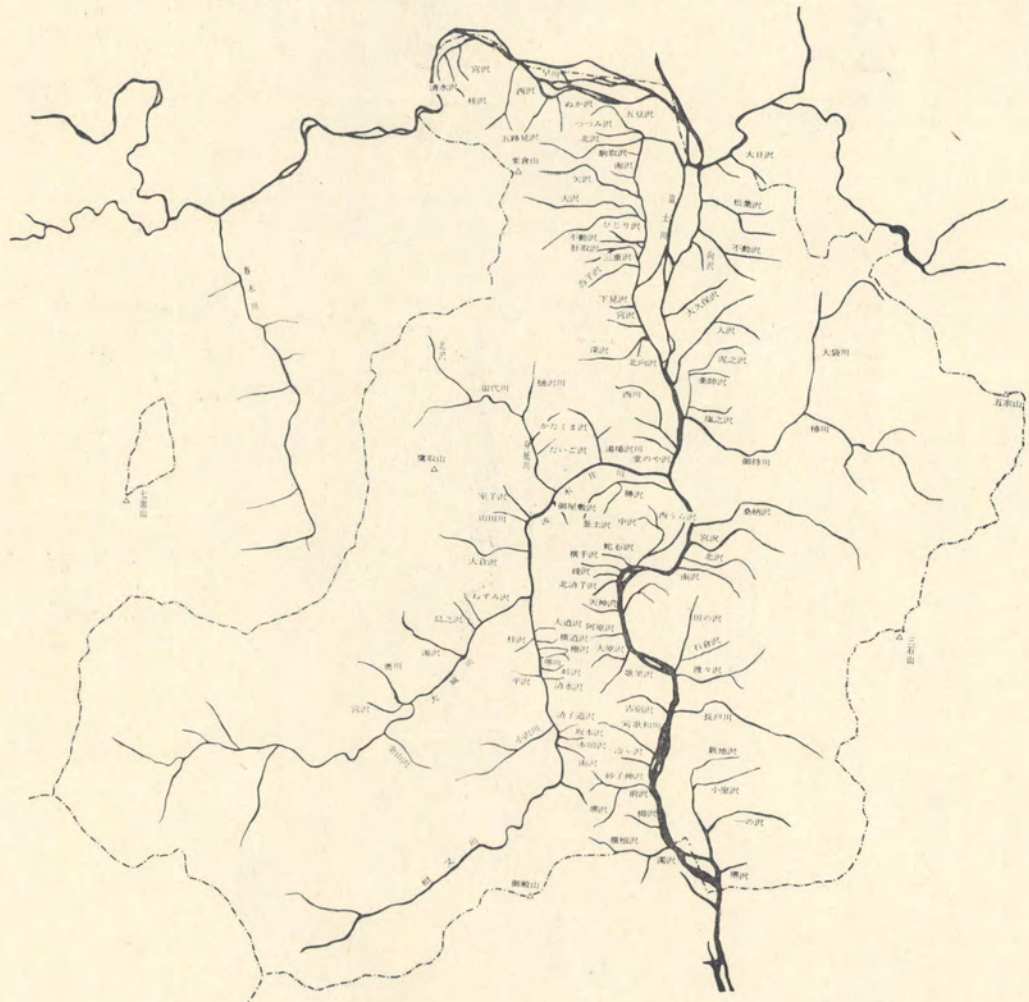
早川は、本町と中富町を境に東西方向に流路を向けている。

波木井川は、その流路を東西にとり、総門付近で身延川を合せ、更に上流二キロメートルの地点で大城川、相又川が合流し、全長約四キロメートルの長さをもっている。

身延川は、身延山、鷹取山に囲まれた一帯を水源とし、二・八キロメートルの全長を持ち断層谷として発達している。上流付近は勾配も急でV字形をした溪谷で、径五〇センチメートルないし一メートルにもおよぶ礫岩などが横たわり、浸食作用や運搬作用が激しいことを示している。

大城川は大城口で礫岩を横ぎり、波木井川の支流として南西の方向に約八・三キロメートルの流路をもっている。源は古谷城から上流安倍峠や一、〇〇〇、二、〇〇〇メートルの高い山なみのふところを激しく浸食、運搬作用をおこなっている。大城川流域にも河岸段丘が各所にみられ、農耕地・住居地として利用されている。上流付近は最近道路開発が進んでいるが反面崩壊がいちじるしく、土砂の堆積がはげしく、その対策が考えられな

図 1 身 延 町 の 水 系 図



れば下流への影響は大きい。

相又川は大城口よりさらに南に、ほぼ断層線にそって流れている断層谷で、榎の木トンネル付近で流路を南西に変え、楯形山層を横断し、瀬戸川層を水源として深い谷を刻んでいる。

富士川東部山地を流れる河川は、御持川や桑柄沢の他は大小十数条の溪谷が礫岩や頁岩、砂岩を主体とした岩層を東西の方向に横断し富士川にそいでいる。

塩之沢にそそぐ御持川は、大笠川と椿川とにわかれ上流に大笠部落や椿草里部落があり、全長約六キロメートルの流路をもっている。角打にそそぐ桑柄沢は、約四・四キロメートルの全長をもち、上流に大崩部落がある。その東部の五宗山や三石山など一、〇〇〇メートル以上の山なみを源とし、流路を西にとり、礫岩層を横断し、谷は深く岩相は浸食の激しさを物語る景観を示している。

町内の河川、沢は大小数多くあり、いろいろの呼び名があつて、地域の人にも一様には呼ばれていないし、場所によりその地名などが使われ呼び名も異っているようである。

第六節 温泉（鉱泉）

前述のように、糸魚川―静岡構造線にそい多数の小割目が生じている。

新第三紀の地層は砂岩、頁岩が主体で構成されているが、著しい地殻の変動をうけて傾き、さらに断層により小地塊に分かれている。鉱泉の大部分はこれらの軟弱な堆積岩の裂目にそって湧出しているもので、いずれも低温であるが、いろいろの成分を溶解しているので地方人に親しまれ遠路から湯治にくる人も多い。

身延町内の鉱泉の湧出場所は

上八木沢 鰻原 利用

図2 温泉（鉱泉）分布図



角打	利用
塩之沢	利用
大島馬込	未利用（かつて利用）
塩野	未利用（かつて利用）
門野	未利用
身延西谷	未利用

これ以外に総門付近、大久保沢（帯金）桑柄沢（角打）、時雨沢（和田）、堺沢（下大島）……など少量ではあるが地層の裂目から湧出している箇所がある。成分は単純鉱泉でいずれも同じような成分であると考えられるが、湧出箇所の地質の状況などにより多少差異がみとめられる。

一、上八木沢 鰻原

源 泉 名―波高島温泉

質―アルカリ性単純泉

浴用適応症―糖尿病・神経痛・心臓弁膜症・慢性関節リュウマチス・慢性皮膚病・慢性婦人疾患

飲用適応症―神経痛・糖尿病・慢性気管支カタル・常習便秘・慢性筋肉リュウマチス・慢性関節リュウマチス・慢性金属中毒症・

神経麻痺

二、角

打

源 泉 名—身延鉱泉

質—單純綠礬泉

浴用適応症—神経症・神経痛・慢性関節リュウマチス・慢性筋肉リュウ

マチス・慢性婦人疾患

飲用適応症—貧血症・慢性マラリヤ・慢性神経症・神経痛・婦人疾患

第二章 気 象

第一節 気象の概況

本県の南端に位する身延町は、本県における温暖多雨区の南部町に次ぎ温暖で雨量も多い。いま気温と降水量について、県下各地と比較してみると表1のようになる。

まず、年平均気温についてみると、山中より五・八度高く、小淵沢よりも四・〇度高いが、甲府と比較してみると意外にも〇・五度高いだけである。これは大陸性気候のため夏期に盆地の気温が急上昇し、峡南地区よりもかえって高温となるためであり、身延町の年平均一四・七度という数字は、主として冬の温暖によるところが大きい。

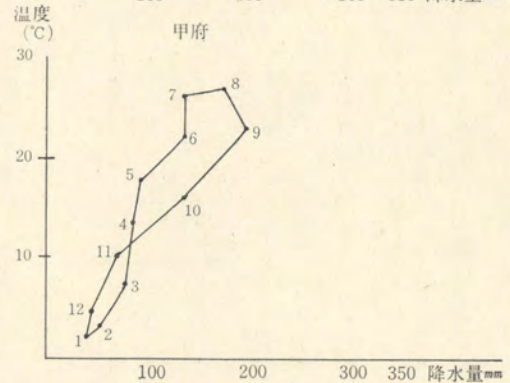
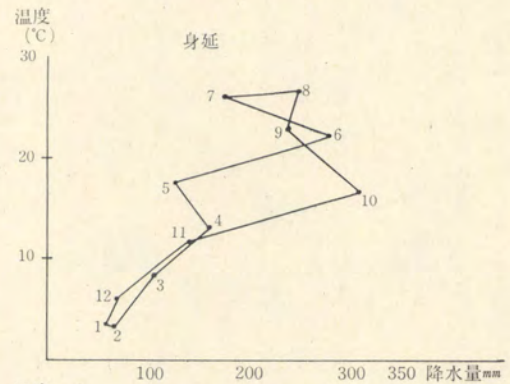
次に、降水量についてみると、年間一、九四四ミリを記録し、山中、南部に次いで三位となっている。表2のクライモグラフは身延と甲府の気候を対比したものであるが、甲府が内陸性の特色をもつ、いわゆる中央高地式の型であるのに対して、身延は海岸気候にやや近い特色を示している。次に、身延が県下気候区分の中で、どのような位置をしめしているかを、県下全体との関連において眺めてみよう。県下の気候区分は、気候を決定する二大要素である気温と、降水量から考察して、次の六区分に分けられる。

1、温暖多雨区—年平均気温一四度以上で年間の降水量は二、〇〇〇ミリをこえて、湿度が高く、気候温和で積雪は、年数回、海岸の気候に近い地区。

表 1 各地の平均気温と降水量 (明治34~昭和25年) 山梨県気象年報

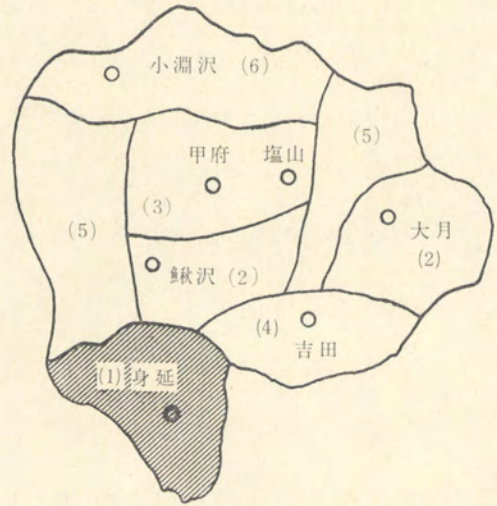
観測所	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
身延	°C	3.5	3.4	7.9	13.0	17.4	21.8	25.9	26.6	23.1	16.7	11.3	5.7	14.7
	mm	58	63	106	158	124	275	170	244	236	307	138	65	1,944
南部	°C	3.7	4.5	8.0	13.4	17.6	21.5	25.4	26.0	22.9	16.9	11.4	6.0	14.8
	mm	78	98	106	212	196	218	278	329	397	253	129	92	2,519
鮎沢	°C	2.0	3.2	7.3	13.3	17.5	21.7	25.8	26.5	22.6	16.1	9.8	4.3	14.2
	mm	45	68	102	114	113	163	170	199	234	177	88	57	1,530
甲府	°C	2.0	3.2	7.2	13.2	17.4	21.8	25.1	26.6	22.7	16.0	10.2	4.5	14.2
	mm	37	51	77	83	92	136	137	175	198	138	69	46	1,239
葦崎	°C	1.7	2.8	6.6	12.8	17.0	21.1	25.4	26.1	22.0	15.8	9.5	4.1	13.7
	mm	39	53	77	95	98	146	145	155	195	142	66	46	1,257
小淵沢	°C	-0.7	-0.4	3.4	9.1	14.1	17.9	22.2	22.6	18.8	12.5	7.4	1.7	10.7
	mm	39	50	77	99	107	174	146	133	187	134	69	43	1,258
日下部	°C	1.8	2.8	6.8	12.9	17.1	21.5	25.5	25.8	22.2	15.6	9.6	4.2	13.8
	mm	34	48	69	80	91	140	151	171	185	133	64	42	1,208
大月	°C	2.4	3.3	5.3	12.3	16.5	20.0	24.7	25.3	21.9	15.0	9.7	5.0	13.5
	mm	30	57	56	91	105	236	203	216	203	255	91	54	1,597
山中	°C	-2.7	-2.5	1.6	7.6	11.8	16.1	20.0	20.3	17.1	11.3	5.9	0.4	8.9
	mm	68	107	164	191	181	273	254	326	368	308	156	89	2,485

表2 クライモグラフ



- 2、温暖中雨区—年平均気温一二度〜四度で、降水年量一、四〇〇〜二、〇〇〇ミリで多分に内陸的気候の地区。
 - 3、温暖少雨区—年平均気温一二度〜四度で気温較差が大きく、降水年量は一、四〇〇ミリ以下で、非常に乾燥し内陸性気候の典型的地区。
 - 4、寒冷多雨区—年平均気温一二度以下で、一月二月の平均気温は零度以下となり、降水年量二、〇〇〇ミリを突破する地区。
 - 5、寒冷中雨区—年平均気温一二度以下で、年降水量一、四〇〇〜二、〇〇〇ミリの地区。
 - 6、寒冷少雨区—年平均気温一二度以下で、一月二月の平均気温は、いずれも零度以下となり、年降水量は一、三〇〇ミリ前後で非常に乾燥する地区。
- いまこの区分に従って、県下を区分してみると、図1のようになり、身延町は概ね久那土〜五開を結ぶ線以南の温暖多雨区の中ほどに位置している。

図1 山梨県気候区分



- | | | | |
|-----|----|-----|---|
| (1) | 温暖 | 多雨 | 区 |
| (2) | 温暖 | 中少雨 | 区 |
| (3) | 温暖 | 少雨 | 区 |
| (4) | 寒冷 | 多雨 | 区 |
| (5) | 寒冷 | 中少雨 | 区 |
| (6) | 寒冷 | 少雨 | 区 |

第二節 気象要素

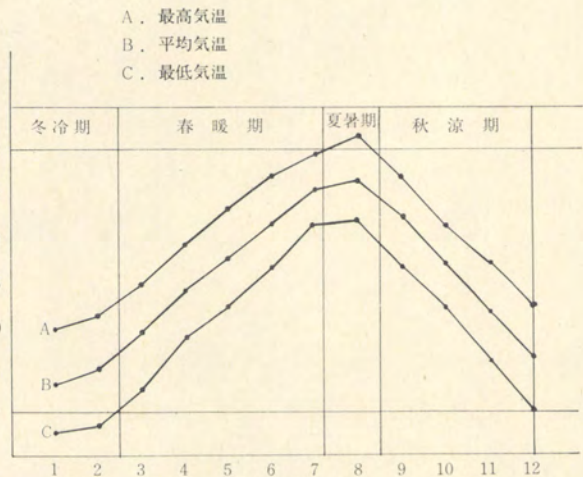
一、気温

(一) 気温の変化

一般にいわれる春暖、夏暑、秋涼、冬冷の現象を年間の気温の変化の上からみて、どこで区切るかについては、いろいろ考え方があると思うが、ここでは、山梨県気象年報における次の区分の方法に従って、身延町の四季を区分し、甲府と比較しながら、その季の特長等について述べてみる。身延町の年間の気温の変化については、一九五一年から一九六〇年まで

表1 身延の気温の変化

(1951~1960)



- A. 最高気温
- B. 平均気温
- C. 最低気温

の期をさらに次の三期に区分できる。

(ア) 交代期 気温は零下を脱して強く上昇しはじめ、日中の最高気温は二〇度近くなることも珍らしくないが、天気は動揺しやすく、暖湿で南風の快晴があるかと思えば北風の寒冷な日もあ

(イ) 晩霜期 高気圧性の快晴が多く、日中の最高気温は二〇度を越え、初夏を思わせるが、夜間は急に気温が低下して時に結霜をみる。

(ウ) 梅雨期 六月中旬より七月上旬までの陰湿な曇天、雨天の続くこの期は、気温がやや低めとなり、日照時間は極めて少なくな

の十年間、身延高等学校で観測したものである。

(表1)

春暖期—気温が〇度以上、三〇度以下の範囲内で変化する期間。

夏暑期—最高気温が連日三〇度を必ず越える期間。

秋涼期—春暖期と同様。

冬冷期—最低気温が必ず氷点下になる期間。

ア 春暖期、こ

表 2

最高・最低気温身延と甲府、南部、鯉沢との比較

(1951~1960)

項目	月													全 年	
	地名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		12
最 高	身 延		9.3	10.8	14.6	19.5	23.6	27.2	29.4	31.1	27.0	21.9	17.0	12.2	20.2
	南 部		9.7	11.2	14.4	19.4	23.5	25.9	28.9	30.8	26.9	22.1	17.3	12.9	20.3
	鯉 沢		8.2	10.0	14.0	19.5	23.4	26.3	29.7	31.4	26.6	21.6	16.4	11.4	20.0
	甲 府		8.3	10.1	14.2	19.6	23.3	26.4	30.0	31.4	26.9	21.6	16.6	11.5	20.0
最 低	身 延		-2.4	-1.1	2.5	8.1	11.8	16.5	21.2	21.8	18.5	12.2	6.0	0.1	9.6
	南 部		-1.4	-0.4	2.8	8.3	12.3	16.9	21.1	22.2	18.8	12.8	6.9	1.2	10.2
	鯉 沢		-2.9	-1.7	2.1	7.3	11.2	16.4	21.0	21.7	18.2	11.3	5.0	-0.6	9.1
	甲 府		-3.5	-2.1	1.8	7.0	11.1	16.6	21.4	21.9	18.2	11.2	4.6	-1.1	8.9

表 3

天 気 現 象 日 数

(1951~1960)

月		雨	雪	霰	雹	霧	濃煙霧	雷電	霜	霜 柱	結 氷	快 晴	曇 天
1	累 計	57	19	5	0	5	0	0	192	55 $\frac{1}{2}$	224	148	99
	平 均	5.7	1.9	0.5	0	0.5	0	0	19.2	7.9	22.4	14.8	9.9
2	累 計	58	20	1	0	1	0	0	130	54 $\frac{1}{2}$	177	118	113
	平 均	5.8	2.0	0.1	0	0.1	0	0	13.0	6.8	17.7	11.8	11.3
3	累 計	102	6	1	0	3	0	3	74	7 $\frac{1}{2}$	70	94	145
	平 均	10.2	0.6	0.1	0	0.3	0	0.3	7.4	1	7.0	9.4	14.5
4	累 計	114	0	0	0	5	0	1	13	0	1	76	157
	平 均	11.4	0	0	0	0.5	0	0.1	1.3	0	0.1	7.6	15.7
5	累 計	121	0	0	0	3	0	5	0	0	0	49 $\frac{1}{2}$	131 $\frac{1}{2}$
	平 均	12.1	0	0	0	0.3	0.1	0.5	0	0	0	6.1	16.4
6	累 計	133	0	0	0	2	0	5	0	0	0	30	206
	平 均	13.3	0	0	0	0.2	0	0.5	0	0	0	3.0	20.6
7	累 計	135	0	0	0	4	0	12	0	0	0	39	177
	平 均	13.5	0	0	0	0.4	0	1.2	0	0	0	3.9	17.7
8	累 計	126	0	0	1	1	2	11	0	0	0	59	148
	平 均	12.6	0	0	0.1	0.1	0.2	1.1	0	0	0	5.9	14.8
9	累 計	148	0	0	0	0	0	6	0	0	0	48	179
	平 均	14.8	0	0	0	0	0	0.6	0	0	0	4.8	17.9
10	累 計	124	0	0	0	8	0	1	0	0	0	74	163
	平 均	12.4	0	0	0	0.8	0	0.1	0	0	0	7.4	16.3
11	累 計	85	0	1	0	8	0	1	53	4	13	128	100
	平 均	8.5	0	0.1	0	0.8	0	0.1	5.3	0.4	1.3	12.8	10.0
12	累 計	58	2	0	0	4	0	1	195	51 $\frac{1}{2}$	157	167	85
	平 均	5.8	2.0	0	0	0.4	0	0.1	19.5	5.7	15.7	16.7	8.5
全年	累 計	1,261	47	8	1	44	3	46	657	34.2	642	1,026	1,703
	平 均	126.1	4.7	0.8	0.1	4.4	0.3	4.6	65.7	3.4	64.2	102.6	170.3

エ

冬冷期 氷点上のみ

ウ

秋涼期 春暖期同様

気温は〇度より三〇度

の間で変化し、本町で

は九月上旬より十二

月下旬までの約四カ月

弱である。この期の前

半は多湿な台風期であ

り、後半は静穏な多照

期ある。

イ

夏暑期 この期は、

梅雨前線の北上通過に

より、陰気な天気から

解放されて本格的な夏

となる。最高気温は連

日三〇度を必ず突破

し、平均気温は二五度

以上、最低気温は二〇

度以下にはならない。

本町の夏暑期は短く約

一カ月である。

で変動することのまったくない期間で、夜間は必ず氷点下になる。十二月の下旬より二月の中旬までの約二カ月間である。なお最も寒いのは、一月の中旬より二月の初旬までであるが、甲府に比較すればやや暖かい。

(二) 最高最低気温

南部観測所開設以来六十年間の記録をみると、南部町における最高の極は、昭和六年(一九三一)八月二十八日の四〇度であり、最低の極は昭和十一年(一九三六)二月二日の氷点下一一・六度である。

次に、一九五一年から一九六〇年までの身延・甲府・南部・鰍沢の最高、最低気温を示すと表2の通りである。最高気温の平均をみると、身延南部と甲府鰍沢とはわずか〇・二―〇・三度、最低気温では身延と甲府の差は〇・七度である。これを内容的にみると、身延南部が年間を通じて徐々に気温が上下しているのに対して、甲府鰍沢は盆地特有の夏と冬の気温の変化のいちじるしさがはっきり出ている。これに対し、身延南部は海岸的気候にやや近い気候といえる。

一九五一一一九六〇年までの天気現象日数は表3の通りである。

二、風

(一) 風 向

自然に起る風を大きく分けると、まず冷たい所から、暖かい所へ向かって吹きこんで起る海陸風、山谷風、季節風がある。次に空気の渦巻によって起る低気圧や、台風、たつ巻などがある。

海陸風 日中は太陽に照りつけられて、海も陸も温度が上がるが、陸地の方が海面よりも温度が高くなる。それで陸上の空気は上昇し、その後へ海より空気が流れて来て起る。夜になると、海面よりも陸地の方がよけいに冷

えるので、陸から海に向かって空気が流れ出して起る。
山谷風 この風は、山間部に起る風で、日中は谷間から山頂へ向って吹き上げ、夜間は平地に向って吹きおろす風である。
季節風 これは海陸風を大型にしたもので、日本付近については述べてみると、夏は太平洋から大陸へ向かっておもに南東の風が吹き、冬は反対に大陸から太平洋に向って北西の風が吹くことが多い。

身延町の風向をみると、富士川筋では日中は南風が多く、夜は北風が吹

表 5 風力のあらわし方

風力	風の吹きぐあい	毎秒メートル	記号
0	静かで煙がまっすぐにあがる	0~0.2	┆
1	煙は、たなびくが風向計には感じない	0.3~1.5	┆↓
2	風が顔にあたるのを感じ、木の葉が動く	1.6~3.3	┆↓↓
3	木の葉や小枝がたえず動く	3.4~5.4	┆↓↓↓
4	砂ぼこりが上がり、小枝がだいたい動く	5.5~7.9	┆↓↓↓↓
5	葉のしげた木がゆれる。	8.0~10.7	┆↓↓↓↓↓
6	大枝が動く、電線が鳴る。かさをを使うのに困る	10.8~13.8	┆↓↓↓↓↓
7	木全体がゆれ歩きにくい。	13.9~17.1	┆↓↓↓↓↓
8	小枝がおれる。立って歩けない。	17.2~20.7	┆↓↓↓↓↓
9	建物に少しばかり損害ができる	20.8~24.4	┆↓↓↓↓↓
10	木は根こそぎとなり、建物の損害は大きい。	24.5~28.4	┆↓↓↓↓↓
11	建物に大損害	28.5~32.6	┆↓↓↓↓↓
12	さらに強い	32.7以上	┆↓↓↓↓↓

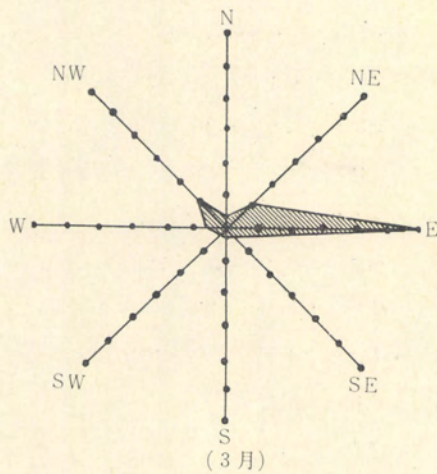
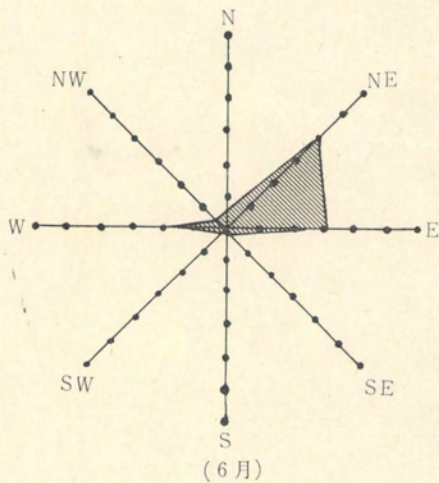
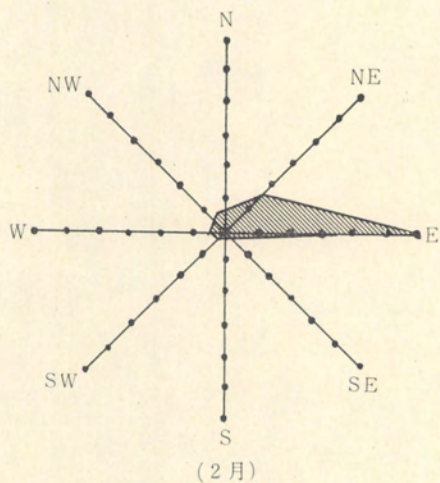
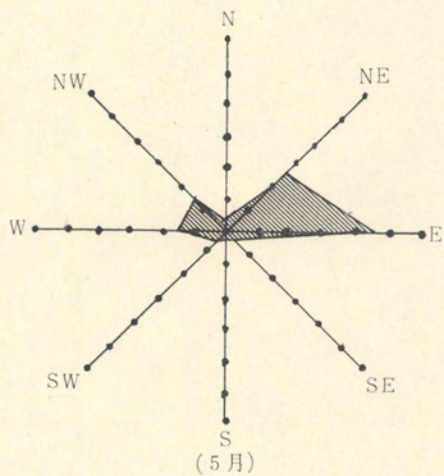
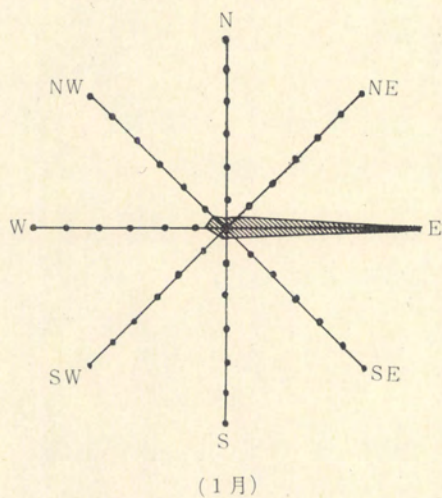
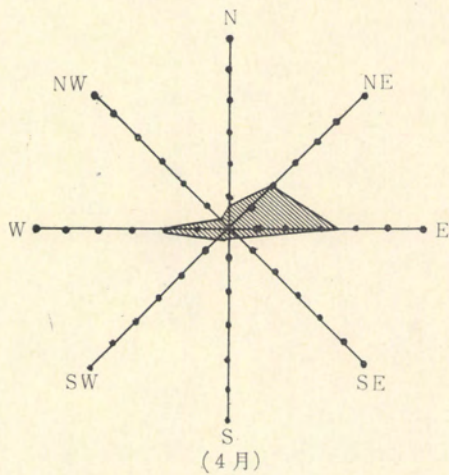
表 4

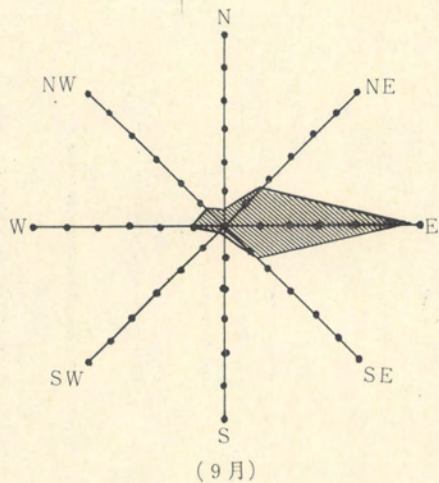
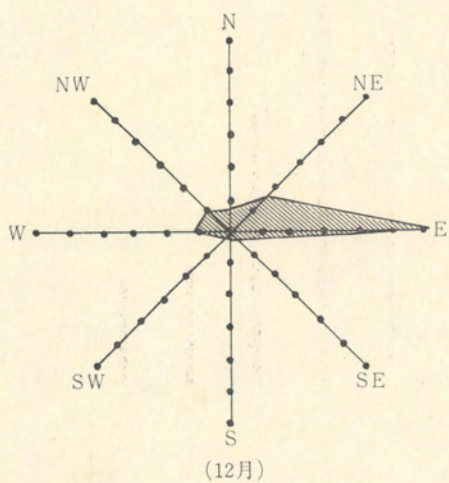
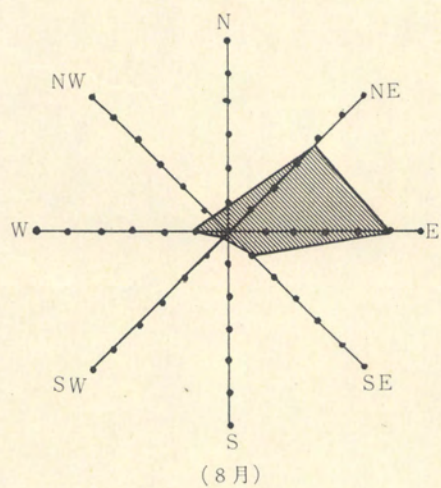
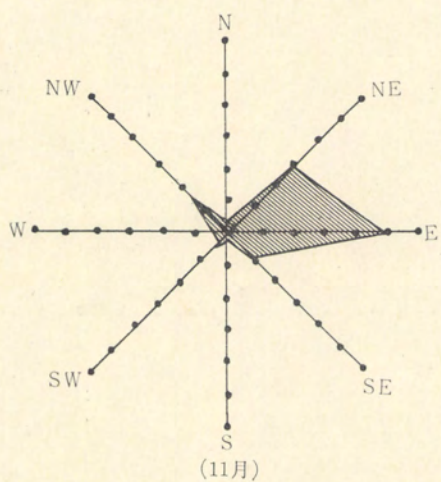
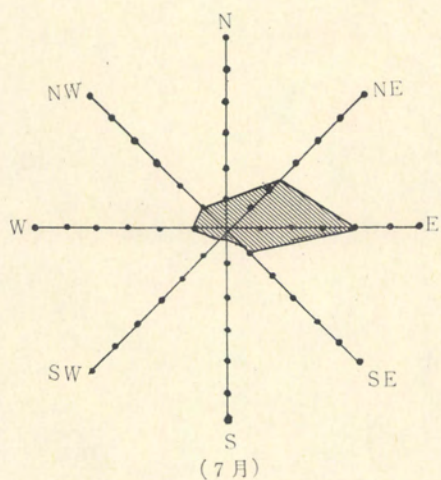
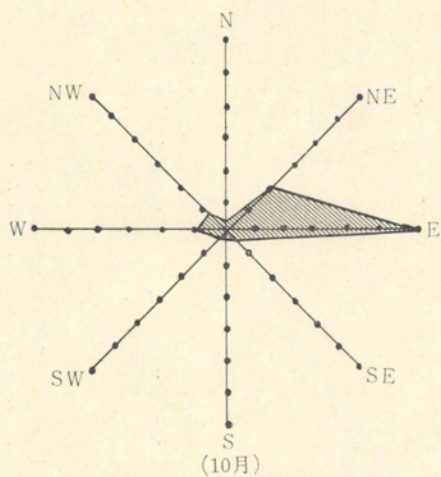
月 別 風 配 図

(1月~12月)

1962年~1966年平均

(毎日午前9時の風向を身延高校で観測したもの)





くことが多い。しかし山間地においては、谷にそって吹く山風や谷風が多い。梅平を例にとってみると、富士川筋では南風が吹いているのに、梅平では、おもに東風が吹くことが表4でわかる。この表は身延高校で、一九六二～一九六六年までの五年間の午前九時現在の風向を、月別に表わしたものであり、東風が最も多く六二三回、次に北東の風が二五四回となっている。南風は意外に少なく六回しかない。このように風向は観測地の地形に大きく左右される。

(二) 風の強さ

風の強さは表5の通り秒間に空気が何メートル動いたかできめる。

三、降水量

身延町の月別の降水量の平均をみると、最低が一月の七一・〇ミリで、それから九月の三五〇・七ミリまで漸昇しているが、その間六月が梅雨期に当るので山を形成している。九月以降は急激に減少してゆき、特に十一月十二月の雨量は少ない。

月間二〇〇ミリを越えるのは、六、七、八、九、一〇月の五カ月で、この間が身延町の雨季であり、太平洋からの直接気流が山地によって上昇し多量の雨をもたらすのである。

次に、一九六一～一九六五年までの五年間の降水量の階級別日数を、甲府と比較してみると、表7になる。本町では特に四、五、六、七、九月が降水日数が多く、中でも五、六月は月の三分の二が雨の降る日を示している。甲府と比較して約三〇日多く、三〇ミリ以上の日数は甲府の約三倍になっている。

次に、一九四〇～一九六五年までの、二五年間の月別日最大降水量をあげると表8の通りである。

表 6 月 別 降 水 量 1951~1960

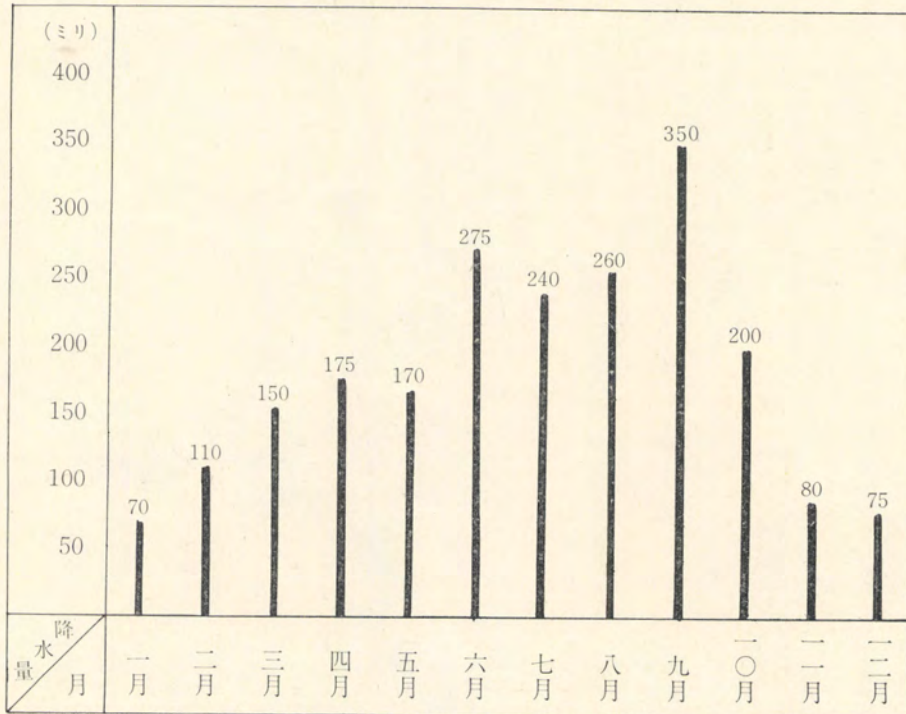


表 7

降水量の階級別日数

身延—甲府の比較 (1961~1965)

身延	月 級	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
		1mm以上	5.6	4.6	10.2	9.8	11.6	13	12.2	8	8.8	8.6	6.6	5.4
	10mm以上	2.6	1.2	3.4	4.6	6.4	7	3	3.2	3.8	3.6	2.6	1.8	43.2
	30mm以上	0.4	0	0.4	2	2.6	3.6	1	1.8	2.2	1.4	0.8	0.6	16.8
甲府	1mm以上	4.4	4.0	8.4	8.8	11.0	14.2	11.0	7.0	8.8	8.2	6.8	5.2	97.8
	10mm以上	0.8	0.6	2.0	3.0	4.2	6.6	2.2	2.0	3.0	3.6	1.3	1.4	31.0
	30mm以上	0.2	0	0	0.4	0.6	1.4	0	0.4	1.6	0.4	0.4	0	5.4

表 8

月別日最大降水量

身延 (1940~1965)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	最多
mm	90.7	93	87	89.4	172	213	215	300	233	352	104.4	67	352
年	1950	1958	1956	1942	1965	1961	1944	1959	1958	1945	1941	1959	1945
日	30	2	19	20	26	27	28	13	17	4	27	2	10/4

表 9

霜および雪の季節

(昭和41年)

地名	霜				雪			
	初日		終日		初日		終日	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
甲府	11/4	11/5	3/31	4/23	12/6	12/27	3/8	3/7
小淵沢	10/10	10/24	5/18	5/6	12/6	11/30	3/8	6/3
山中	10/1	10/12	5/20	5/7	12/6	11/21	4/1	6/6
大月	11/4	11/3	4/2	4/12	12/28	12/16	3/29	2/26
荻崎	11/4	11/2	3/31	4/18	12/6	12/25	3/8	3/18
鵜沢	11/11	11/15	3/31	4/10	12/28	12/29	3/8	3/5
身延	11/11	11/12	3/31	4/11	12/28	1/4	3/20	3/6
南部	11/11	11/10	3/31	4/15	12/28	1/11	3/6	2/24

(年平値の統計は昭和26年~昭和35年)

四、積雪、降霜、結氷

平年六一日である。また県下各地をみると南部で四五日、鵜沢で六七日、大月で七三日、荻崎で八四日、甲府で七一日、小淵沢で一二五日、山中で一三七日となっている。一月以降に初雪が降る地域は、おおむね身延以南であり、三月以前に終雪を見るのは南部町以南である。次に、降霜は十一月中旬からみられ、四月十日ごろ終わる。また、結氷は、十一月下旬からみられ三月中旬ごろ終わる。

表9をみると、平年初雪は一月六日、終雪は三月六日になっていくが、昭和四十一年は、初雪が十二月二十八日で、十二月中に積雪をみているが、このようなことは極めて少ない。また、終雪も三月二十日、時には桜の蕾に雪の降りかかることもごくまれにはある。この初終日数は



昭和42年冬の大雪風景

第三節 気象と災害

一、風 水 害

災害には、地震、暴風、冷害、凍害、早魃^{かんばつ}などがある。地震や火山噴火によるものは過去、関東大地震（一九二三、九、一）や北伊豆地震（一九三〇）の時には、本県にも相当被害があり、富士山だけでも有史以来二七回の噴火の記録が残されている。しかし、本町の特殊性として最も注意しなければいけないのは風水害である。風水害の大部分は、台風によるものである。特に台風が多く来るわけではないが、地形の関係で洪水が起りやすく、昔から人々を苦しめてきた。本県の大水害の記録は、平安時代初期

の歴史に残っているが、大小の水害は数えきれず、明治以後の暴風雨および豪雨の主なもの表1、2からみてもいかに多かったかということがわかる。

表 1 豪雨水害時の降水量

昭41.9 (26号)	36.6 (新潟)	34.9 (15号)	34.8 (7号)	33.7	29.9
(5日間)	(7日間)	(4日間)	(2日間)	(8日間)	(3日間)
観測場所 (身延)	(南部)	(身延)	(南部)	(南部)	(南部)
計 376mm	676.4	206.4	389.3	446.9	472.1
昭3.9	22.9	20.10	11.9	明40.8	明43.8
(2日間)	(3日間)	(4日間)	(2日間)	(5日間)	(6日間)
15—180.8	13— 20.3	2— 15.5	26—299.5		5— 1.4
16—129.5	14—190.5	3— 33.0	27—168.3		6— 41.0
	15—110.7	4— 35.2			7— 42.0
		6— 60.6			8—131.0
					9—252.0
					10—187.0
(身延)	(身延)	(身延)	(身延)	(南部)	(南部)
310.3	321.5	460.5	467.8	469.3	461.8

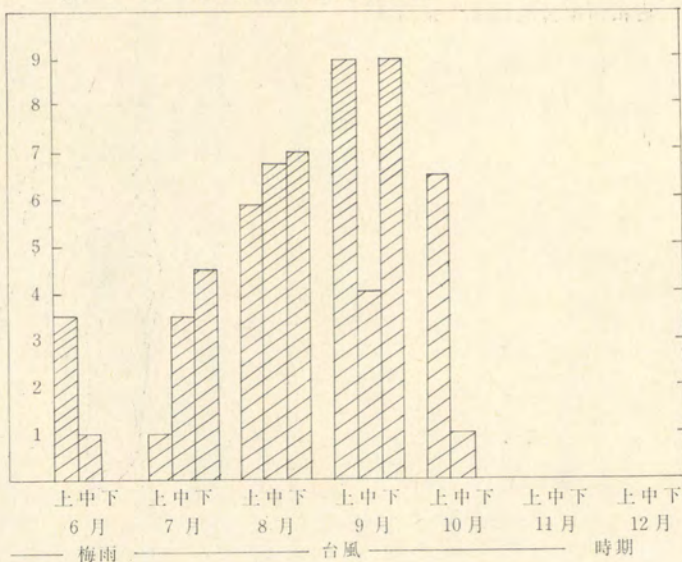
(注) 大正時代には大水害はない。

災害の原因が、本県に接近または通過した台風に基因していることは明らかだが、被害といえれば殆んどが水害で、強い暴風雨の記録は僅少である。また、風の強い場合には、比較的雨は少ないことが、過去における最大の水害である明治四十年や、四十三年の例からみてもわかる。大水害であつても、暴風の被害は全然なかったことがいえる。

また、極めてまれな例であるが、明治三十三年九月の台風では、北西の風が甲府で三二・三メートル、県下の倒壊家屋が千余戸であつたが、水害

表 2 暴風雨及び豪雨頻度表

(昭27~35年)



はなかつた。

次に表3で戦後における本県関係の主な台風を年代順にあげてみよう。

昭和三十四年八月十三、十四日の台風は、過去における最大の被害と、最大の風害を同時に起こし、家屋、人命、農産物、山林等に甚大な被害を与えた、本県の被害のはげしいのは地形、地質によるところが多いが、①河川の傾斜が急で、豪雨時の水流が強勢で破壊力が大きい。②地質の関係で地盤がもろく、山崩れが起きやすい。

③多くの河川は天井川で、河床が年々高くなり、堤防がその役を果たしに

表 3

戦後の本県に関する主な台風

年月日	名称	被害地域	死者	行方不明	傷者	全壊家屋
昭19. 9.18	枕崎台風	全 国	2,084	1,046	2,295	23,945
20.10.10	阿久根台風	全 国	351	70	184	288
22. 9.15	カスリーン	関東・東北	1,077	853	1,547	5,301
23. 9.16	アイオン	〃	512	1,956	326	45,077
24. 8.31	キテイ	〃	135	479	25	3,027
25. 8. 3	11号・12号	〃	40	59	764	31
25. 9. 3	ジェーン	全 国	398	141	36,062	17,062
26.10.14	ルー ス	〃	572	371	2,644	21,527
27. 6.23	ダイナ	関東・東北	65	70	28	52
28. 9.25	テ ス	近畿・東海	393	85	2,559	5,989
29. 8.18	グレイス	全 国	30	33	77	331
29. 9.13	ジューン	〃	107	37	31	1,648
29. 9.18	ローナ	四国以東	36	24	59	52
29. 9.25	洞爺丸	全 国	1,361	400	1,601	8,005
31. 8.16	パプス	〃	33	3	213	1,864
31. 9.27	ハリエツト	〃	20	11	41	489
33. 7.23	アリス	関 東	26	14	64	106
33. 8.25	フロシイ	四国・関東	15	30	39	86
33. 9.27	狩野川	関 東	888	381	1,138	1,239
34. 8.14	ジョーシア(7号)	東 日 本	147	47	1,503	3,297
34. 9.26	伊勢湾(15号)	中国以東	4,997	402	38,921	36,134
36. 9.16	第二室戸	全 国	186	15	3,877	13,294
39. 9.24	20 号	〃	49	3	540	3,256
40. 9.10	23 号	〃	62	—	61	1,096
40. 9.17	24、25号	〃	111	—	565	140
41. 9.26	26 号	関 東	318	—	796	2,493

くくなる。

④水系は富士川に集中し、短時間で広はん地域の水を集め水害を招く結果になりやすい。

また、山腹の崩壊を防ぎ、出水調節の役割を果たすべき山林も、維新後乱伐され明治四十年、四十三年の大水害をこうむり御料林下賜もあって、はじめて治山、治水、造林の重要性にめざめ、森林の保護育成につとめた結果、表1でもみられるように大正時代によりやくその効果があり大水害

表 5
昭和34年台風15号全県被害

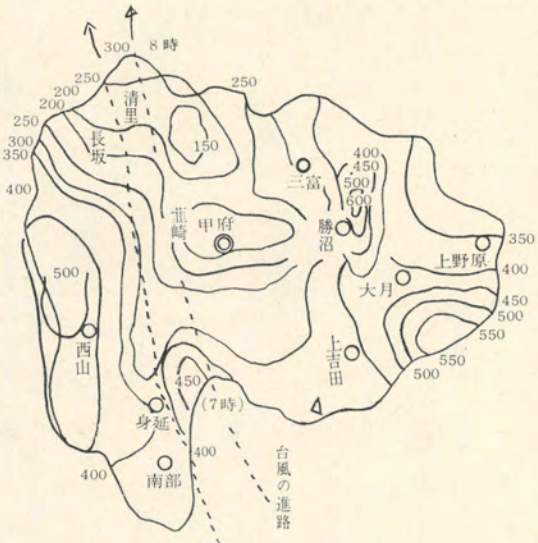
被害の種別		被害
人的被害	死亡	15
	負傷者	109
	行方不明	—
建物被害	全壊	1,034
	半壊	2,047
	流失	40
	床上浸水	622
	床下浸水	961
	一部破損	21,516
	非住家住宅	8,036
	耕地被害	水田・流失埋没
	冠水	1,000ha
	畑流失埋没	99ha
	畑冠水	266ha
	道路損壊	285カ所
	橋梁流失	86カ所
	堤防決壊	43カ所
	山(崖)くずれ	109カ所
	鉄軌道被害	26カ所
	通信施設	5,188回線
	木材流失	106石
	罹災世帯数	4,168
	罹災者概数	18,334

表6 15号台風本町被害状況

被害の種別		件数合計
人的被害	死亡	0
	重傷	不明
	軽傷	不明
住居の被害	流失	2
	全壊	55
	半壊	95
	床上浸水	21
	床下浸水	不明

風は、その中心が富士川河口付近(図1)に上陸し、そのまま富士川にそって北上し、猛烈な暴風雨を伴って本県を縦断した台風で、本町での被害は表4のようであり、なお、同年九月、十五号台風が、これまた例もみな

(図1) 昭和34年台風7号雨量分配図 (8月12~14日)



がなくすんだのであるが、第二次世界大戦の結果、戦後の山林伐採は山腹の地はだを露出し、水害の危険が増大し、被害も莫大なものとなった。最近の被害の大きかった昭和三十四年八月の七号台

(表4 身延町) 昭和43年8月13、14日7号台風被害総括

土木関係被害額			種別		件数合計	数量合計	
千円			人的被害	死者	0	0	
A	町関係	91,170		行方不明	1	1	
B	県国関係	250,000		重傷	3	3	
C	農業土木関係	85,635		軽傷	4	4	
D	農地関係	35,819		全壊	18	18	
E	農作物関係	34,071		半壊	44	44	
F	山林関係	80,467		床上浸水	122	122	
G	一般被害	61,893		床下浸水	201	201	
H	公益収益事業	1,103		土木関係被害	(町)道路	93	5,373 m
I	公共施設	4,330			(町)橋梁	47	34.5
J	水産物	385			(国道)道路	18	3,700
K	(A~I)	644,813	(国道)橋梁		10	150	
	(K~B)	394,813	(町)河川		14	325	
			(国道)河川	22	2,950		

表 7 河川の水位

河川	場所	警戒水位	今回水位	左記時間
富士川	富士見橋	3.00	3.5	25日午前4時
富士川	月見橋	3.00	3.7	〃 4
笛吹川	うかい橋	2.40	2.93	〃 3
桂川	強瀬	2.10	5.00	〃 1
芦川	芦川	2.10	3.70	〃 3

昭和四十一年九月二十三日、硫黄島の南東約八〇キロメートル付近に発生した台風二十六号は、しだいに速度を早めながら西進、のち北西に進み、二十四日六時には硫黄島西方約三〇〇キ

いほどの超大型台風で、主として暴風による被害が大きかった。本町でも表6でしめすように、この外被害が大きく、同じ年に県下を二度襲ったのは前例のないことである。
 続いて四十一年九月の二十六号台風表9は、県下に死者、行方不明一七五人、家屋被害一八、四〇〇世帯、被害総額二七五億円にのぼる大きなつめ跡を残し、特に人命被害は県史上空前の数字を記録した。

表 8 26号台風雨量および風力・気圧 (その1)

地区	甲府	身延	船津	初狩	精進	雨畑	上九色	黒金山	奈良田
連続雨量	179	376	297	178	367	295	300	190	312
最大時雨量	41.4	—	82.8	37	—	63	100	59	55
最大風力	8	5	10	—	7	—	—	—	—

- (注) 1. 連続雨量は21日から25日までを合せたもの。
 2. 最大雨量は25日0時30分から午前1時30分ごろ
 3. 風力階級 5 = 風速8.0~10.7m 7 = 13.9~17.1m
 8 = 〃 17.2~20.7 10 = 24.5~28.4

鉄道不通	中央線	16身延線	154計	170カ所
電信電話被害	市内 204	市外 5,112	計 5,316	回線

人的被害	死者	141	行方不明	34
	重傷	65	軽傷	143
家屋の被害	全壊(流失)	世帯 311	半壊	562
	床上浸水	2,393	床下	11,031
	一部被害	3,530		
公共建物被害	全壊(流失)	17棟	半壊	15棟
	その他	183棟		

(その2)

	船津	甲府
最低気圧	880.4mb	973.6mb
瞬間最大風速	南々東40.1m	北東32.7m
最大風速	24.7m	17.5m
最大時雨量	82.8mm	41.4mm
21日からの降雨量	297.0mm	179.0mm

表 9 台風26号 県下の被害 (10.31現在)

	件数	被害額
土木関係	県営工事	2,031件 5,589,342千円
	市町村工事	973 1,992,582
	計	3,004 7,581,924
学校被害	93校	81,299
農業関係		4,713,346
林業関係		10,576,595
商工業関係	1,420件	452,144

ロメートルに達して、毎時四〇キロメートルの速度で北上をはじめた。その後勢力を増しながら北上を続け(小型から中型となり速度も六〇キロメートルとあがる)発生からわずか二日の二十四日二十三時頃から静岡県御前崎付

表 10 台風26号 身延町の被害
(41.9.24~25)

種 別		件 数	被 害 額
人的災害	死者	3	—
	重傷	3	—
	軽傷	6	—
家屋被害	全壊(流失)	24	23,000千円
	半壊	30	15,370
	床上浸水	171	35,365
	床下浸水	410	14,400
	非住家	95	9,770
	学校	4	2,750
	公共建物	10	4,650
	町営住宅	9	3,295
	土 木 被 害	道 路	50
国・県の係	橋 梁	7	79,500
	河 川	68	154,960
補助	河 砂	12	63,000
	道 路	94	69,023
橋 梁	橋 梁	28	13,055
	災 害	河 川	54
林・中間地		39	55,600
単独災害	道 路	32	2,654
	橋 梁	7	600
	河 川	4	375
農業土木補助災害	農 地	100	68,235
	道路施設	149	129,672
農 林 水産物被害	農産物	29,500	63,975
	林産物	548	77,661
	畜産物	1	5,010
	水産物	1	4,230
	その他	4	3,140
中小企業被害	商 業	48	21,798
	工 業	10	18,120
合 計 国県を除く			(778,067)
			1,116,927



昭和41年26号台風で全滅した丸滝沖村の人家



昭和41年26号台風で山崩れのため倒壊、死者を出した橋町の住宅



濁流と化した和田平部落の道路

時三十分暴風洪水警報を発令し翌三時四十五分暴風警報を解除した。
台風が県内に猛威をふるったのは約二時間、被害地が実際に暴風雨圏内であったのは、わずか一時間ぐらいであった。

二、地 震

甲府気象台の記録によると、昭和三十八年から四十一年までの間に二・五回、人体に感じない

近に上陸した。

有感の年平均回数は、人体に感ずるもは二・五回、人体に感じない

上陸後も台風の勢力は衰えず(速度七〇キロメートルとあがる)二十五日一時頃から県南部に入り、西北ぞいに西湖―塩山―三富付近を通り埼玉

県北部に抜けた。このため、二十四日二十三時頃から県下全域にわたって風雨が強まり、二十五日一時過ぎには暴風雨となった。(注甲府・船津とも一時四十分頃最低気圧を観測)甲府気象台は台風接近に伴い二十四日二十一

もの五一・八回となっている。

甲府气象台が地震観測開始以来記録したもとも強い地震は、大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災および翌十三年一月十五日の丹沢山地震で、ともに震度は烈震であり県内に被害を生じた。次は、明治四十二年（一九〇九）八月十四日の近江姉川の地震で震度は強震であった。氣象五十年報によると、身体に相当強く感ずる地震は年一回程度である。

三、その他の災害

(一) 雪害

大雪の害は本町は海岸的気候のため、ほとんどないが昭和四十四年には春の重い大雪が二度にわたり降ったため、近年稀にみる被害があり、特に七十八年生から十五年生の杉、檜に被害が多かった。

地区別被害状況は次ぎの通りである。

地区名	樹種 天別	林齢	被害面積	被害本数	被害材積	被害金額	被害名
下山	杉	人工	五、一〇〇	一、五〇本	五、六〇m	三四、六四〇円	雪折
身延	〃	〃	四、〇〇〇	五、六九	五、六九	七四七、三六	〃
大河内	〃	〃	三、〇〇〇	二、九二〇六	二、九二〇六	二七、六五、六四	〃
豊岡	〃	〃	二、七〇〇	一、四一七〇	一、四一七〇	二、五四、八〇	〃
計			四六、一〇〇	一、四三三五	一、四三、一五	一〇、九二、四〇〇	

一石当り四、〇〇〇円として算定。当り一四、四〇〇円とする。（役場資料）

第四節 気象俚言

日本の気象は変りやすく、また、災害が多いので、昔から気象に関することわざが多く生活の身辺から生れている。然し、これらの気象の俚言も

気象観測や、通報の発達とともに、人々に忘れ去られるものが多くなって
いるのが現状である。

本町の気象俚言にはどのようなものがあるのだろうか。四地区の中学生
徒の調査したものをあげてみると共通したものが数多い。

- 太陽がかさをかぶると雨がふる。
- 虹が川をまたげば雨がふる。
- 朝虹はその日の大洪水。
- 朝立雨と女の腕まくりはおどろくな。
- 池で鯉がはねると雨が近い。
- 奥の院に雲がかかると雨が降る。
- 雨降りに奥の院にきりがかかると大雨はない。
- 大城雨のみのいらす。
- 山が近くに見えると雨がふる。
- 大笠の山が曇ると雨がふる。
- 七面山に横雲がかかると雨。
- 北清子の山になごがかかれば雨。
- 猫の手が耳を越すと雨がふる。
- 奥の院の太鼓の音が下山に聞えると雨。
- 朝鳩その日の大洪水、夕鳩あしたの大日照り。
- 川の水がさが少なくなると雨が近い。
- 沢のかにかおかに上ると大雨になる。
- 朝やけがすると雨が近い。
- くもや、はちの巣が低いと台風が多い。
- 夜あがりは三日もたぬ。
- 四つ（十時頃）の地震は日照り。
- 六つ（朝五時頃）の地震は大風。
- 八つ半（三時〜四時）の地震は雨。

第三章 生 物

第一節 身延町の植物

植物の分布を決定している要因には、その土地の気温・湿度・降水量・降雪量をはじめとする気象条件のほか、地形、地質の諸条件がある。

本町は県下においても比較的温暖であり、降水量も多い地域である。これは太平洋岸の暖い気流が富士川の谷に沿って、本町あたりまで入り込んだので、植物の生育にも大きな関係をもっている。

植物は諸条件の適した地域にのみ生存を続けるものである。暖いところを好む植物と、寒いところに生育する植物と、また、その中間にある植物というように、これは低地から高山へと植物が違うのと同様である。

身延町においては、低地はほぼ暖帯に属しまた山麓の一部も暖帯に属している。これ以上のすべては温帯である。この暖帯はいわゆる暖地性植物が分布している特殊な地域である。本町飛地の七面山は亜寒帯に属し高山植物を見ることが出来る。

一、身延町の植物分布の概況

本町はその地理的条件により、南方系の植物、北方系の植物、またその中間の温帯性の植物など、多種多様な植物が分布していて、美しい郷土の自然環境をつくりだしている。

冬枯れの山々を見れば、植林されたスギ・ヒノキ林・葉を落した雑木

林、また黄みどりの竹林、それぞれの個性美にあふれている。春はまた若葉や花の美しさがその山相を変え夏の深緑は山々の威容を増し、秋の紅葉の美しさは人々を芸術の世界へ惹きいれる。

身延町の植物の分布について記すには、身延の山々をくまなく跋涉調査しなければならぬが、いまだに完全とはいえない現状であるので、二・三の地区の調査により、その分布の概況とする。

はじめに身延町全般の植物の垂直分布（高さによって分ける）について、各地区共通のものをあげてみる。

(一) 平地の植物

平地の植物とは、人家の庭先、道路わき、田畑、水辺などに生えている雑草で、多くは方言で呼ばれているものが多い。また見慣れていても名を知らない人が多い。これらの植物の中には多くの外国から入って来た帰化植物という雑草が繁殖している。

ア 道、庭の植物

ドクダミ（ドクダミ科）、クワクサ、カナムグラ（クワ科）、カナムシ（イラクサ科）、ミチヤナギ、イタドリ、サナエタデ、イヌタデ、オオイヌタデ、スイバ（タデ科）、アカザ（アカザ科）、ヒナタイノコズチ、イヌビエ（ヒエ科）、ザクロソウ（ザクロソウ科）、センニンソウ（キンポウゲ科）、トウダイグサ、ニシキソウ、コニシキ、コミカンソウ（ダイクサ科）、スベリヒユ（スベリヒユ科）、タテハコベ、ツメクサ、ノミノフスマ、ウシハコベ、ハコベ（ナデシコ科）、ムラサキケンマ（ケシ科）、ナズナ、マメグンバイナズナ、イヌガラシ（アブラナ科）、キンミズヒキ、ヘビイチゴ（バラ科）、ゲンゲ、ヤハズソウ、ウマゴヤシ、ミヤコグサ、ムラサキツメクサ、シロツメクサ、カラスノエンドウスズメ、エンドウ（マメ科）、ゲンノシヨウコ（フウロウソウ科）、カタバミ（カタバミ科）ヤブガラシ（ブドウ科）、スミレ、タチツボスミレ、ヒメスミレ（スミレ科）、アレチマツヨイグサ、マツヨイグサ、オオマツヨイグサ（アカバナ

科)、チドメグサ、ヤブジラミ(セリ科)、ヒルガオ(ヒルガオ科)、カキドオシ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、メハジキ(シソ科)、ヨウシエチヨウセンアサガオ、センナリホオズキ(ナス科)、タチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)、オオバコ(オオバコ科)、ヤエムグラ、ハナムグラ、オオバエノヤエムグラ、アカネ(アカネ科)、ヨモギ、ヨメナ、ユウガニク、ノコンギク、センダングサ、アメリカセンダングサ、ヒメジョオン、ヤナギバヒメジョオン、ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、オオアレチノギク、ハルジオオン、ハハコグサ、アキノハハコグサ、アキノノゲシ、ジシバリ、オニノゲシ、ノゲシ、ノボロギク、タンドロポロギク、ベニバナポロギク、タンポポ、オナモミ(キク科)、カモジグサ、コヌカグサ、コブナグサ、カラスミギ、ヒメアブラサスキ、ギョウギンバ、チガヤ、メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、チカラシバ、ススキ、イヌビエ、スズメノカタビラ、キンエノコロ、エノコログサ、シバ(イネ科)、コゴメガヤツリ、カヤツリグサ(カヤツリグサ科)、ツユクサ(ツユクサ科)ノビル(ユリ科)、ヒガンバナ(ヒガンバナ科)

イ、田・畑の植物

カラスビシャク(サトイモ科)、スベリヒユ(スベリヒユ科)、ハコベ、コハコベ、ノミノフスマ(ナデシコ科)、キツネノボタン、タガラシ(キンポウゲ科)、ナズナ、タネツケバナ、イヌガラシ、クンバイナズナ(アブラナ科)、セリ(セリ科)、ホトケノザ(シソ科)、アゼナオオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)、オオバコ(オオバコ科)、オオジシバリ(キク科)、ヒルムシロ(ヒルムシロ科)、スズメノテッポウ、コブナグサ(イネ科)、ココメガヤツリ、マツバイ、テンツキ、ヒデリコ、アセテンツキ(カヤツリグサ科)、アオウキクサ(ウキクサ科)、イボクサ(ツユクサ科)、コナギ(ミスアオイ科)、ツルボ(ユリ科)

ウ、水辺の植物

ウナギツカミ、アナギタデ、タニソバ、アキノウサギツカミ、ミゾソバ(タデ科)、タガラシ(キンポウゲ科)、アメリカセンダングサ(キク科)

コガマ(ガマ科)、クロモ(トチマガミ科)、チガヤ、ジュズダマ(イネ科)

エ、川原の植物

フジナデシコ、カワラナデシコ、フシグロ(ナデシコ科)、マメグンバイナズナ(アブラナ科)、ノイバラ(バラ科)、ヤハズソウ、マルバヤハズソウ、メトハギ、ネコハギ(マメ科)、オオマツヨイグサ、マツヨイグサ、アレチマツヨイグサ(アカバナ科)、カワラハハコ、カワラヨモギ、オトコヨモギ、ヨモギ、アメリカセンダングサ、カワラニガナ、コマナモミ(キク科)、カモジグサ、ギョウギンバ、チガヤ(イネ科)、ネシバナ(ラン科)

(二) 林・草原の植物

この地帯は海拔四〇〇メートルから五〇〇メートルまでの暖帯から温帯にうつりかわる地帯で、アラカシ、シラカシの自生の多い地帯である。本町全般の植物をあげる。

カワヤナギ、イヌコリヤナギ(ヤナギ科)、オニグルミ(クルミ科)、ヤマハンノキ、ハンノキ、イヌシデ、クマシデ、アカシデ(カバノキ科)クリ、アカガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、クヌギ、コナラ、(ブナ科)、ムクノキ、エノキ、ケヤキ科(ニレ科)、コウゾ、クワ(クワ科)、ヤブマオ、カラムシ(イヌクサ科)、アケビ、ミツバアケビ(アケビ科)、ヤマコウバシ、クロモジ、アブラチャン、タンコウバイ(クスノキ科)、サンショウ、イヌザンショウ、フエザンショウ、コクサギ(ミカン科)、カマツカ、イヌザクラ、ウワミズザクラ、チヨジザクラ(バラ科)、ニガキ(ニガキ科)、ヌルデ、ヤマウルシ(ウルシ科)イヌツゲ(モチノキ科)、ツルウメモドキ、ニシキギ、コマユミ(ニシキギ科)、イロハモミジ、ウリハダカエデ(カエデ科)、ヒザカキ、ツバキ(ツバキ科)、キブシ(キブシ科)、ウコギ、タラノキ、ウド、キズタ、ハリギリ(ウコギ科)、ネムノキ(マメ科)、アセビ、ヤマツツジ、ナツ

タ科)、ヤブミヨウガ(ツユクサ科)

(三) 山の植物

海抜五〇〇メートルから六〇〇メートル以上の地帯で温帯に属し、常緑広葉樹は少なくそれにかわって、落葉広葉樹の多い地帯である。

ヤマナラシ(ヤナギ科)、サワグルミ(クルミ科)、ヤシヤブシ、ハンノキ、アカシデ、イヌシデ、ツノハシバミ(カバノキ科)、クリ、ブナ、イヌブナ、タヌギ、コナラ、ミズナラ(ブナ科)、エノキ、ケヤキ(ニレ科)、カツラ(カツラ科)、クロモジ(クスノキ科)、シラキ(トウダイグサ科)、オニシバリ(ジンチョウゲ科)、ツルグミ(グミ科)コトウズル、ウツギ、マルバウツギ、バイカウツギ、コアジサイ、ヤマアジサイ、ノリウツギ(ユキノシタ科)、ズミ、カマツカ、ヤマザクラ、マメザクラ、チヨウジザクラ、エドヒガン、コヒガンザクラ、ウワミズザクラ、クマイチゴ、ナナカマド、シモツケ、ココメウツギ(バラ科)、キハギ、フジ(マメ科)、キハダ(ミカン科)、ヌルデ、ヤマハゼ、ヤマウルシ(ウルシ科)イヌツゲ(モチノキ科)、ツルマサキ、ツリバナ、マユミ(ニシキギ科)ミツバウツギ(ミツバウツギ科)、ウリカエデ、ウリハダカエデ、ホソエカエデ、ハウチワカエデ、イタヤメイゲツ、イタヤカエデ、イロハモミジメグスリノキ、チドリノキ、ミツデカエデ(カエデ科)、トチノキ(トチノキ科)、アワブキ(アワブキ科)、シナノキ(シナノキ科)、サルナシ、マタタビ(マタタビ科)、ツバキ、ナツツバキ(ツバキ科)、キブシ(キブシ科)、コシアブラ、ウコギ、タラノキ、タカノツメ、ハリギリ(ウコギ科)、クマノミズキ、ミズキ、ヤマボウシ、ハナイカダ(ミズキ科)、リョウブ(リョウブ科)、ネジキ、アセビ、ミツバツツジ、コバノミツバツツジ、ヒカゲツツジ(ツツジ科)、サワフタギ(ハイノキ科)、エゴノキハクウンボク(エゴノキ科)、イボタノキ、ヒイラギ(モクセイ科)、ムラサキシキブ、コムラサキシキブ、ヤブムラサキシキブ、クサギ(クマツツラ科)、ツクバネウツギ、キンギンボク、ニワトコ、ガマズミ、コバノ

ハゼ(ツツジ科)、エゴノキ(エゴノキ科)、イボタノキ(モクセイ科)クサギ(クマツツラ科)、クコ(ナス科)、ニワトコ、ガマズミ、コバノガマズミ、コマキ、ヤブチマリ(スイカズラ科)、タマアヂサイ(ユキノシタ科)、ケンポナシ(クロウメモドキ科)、マンリョウ、ヤブコウジ(ヤブコウジ科)、イヌガヤ(イヌガヤ科)、センニシソウ、ホタタンズル、コバノボタンズル、アキカラマツ(キンボウゲ科)、アカメガシリ(トウダイグサ科)、ナツグミ、アキグミ(アキグミ科)、ウバユリ、ヤマユリ、サルトリイバラ(ユリ科)、オニドコロ、ヤマノイモ(ヤマノイモ科)、ウマノアシガタ(キンボウゲ科)、ツツラフジ、アオツツラフジ(ツツラフジ科)、ウツギ、ヒメウツギ、バイ、カウツギ(ユキノシタ科)、キンミズヒキ、ヤブヘビイチゴ、ノイバラ、チリバナイバラ、クサイチゴ、ニガイチゴ、ナワシロイチゴ、シモツケ(バラ科)、ヤブマメ、ヌスビトハギ、ノササゲ、コマツナギ、ナンテンハギ、フジ、ヤマハギ(マメ科)、ヒメハギ(ヒメハギ科)、ノブドウ、エビズル、ツタ(ブドウ科)、ミズダマソウ(アカハナ科)、ミツバ、ヤブニンジン、ウマノミツバ(セリ科)イチヤクソウ(イチヤクソウ科)、オカトニオ(サクラソウ科)、リンドウ(リンドウ科)、ジュウニヒトエ、ヤマハツカ、ウツボグサ、アキノタムラソウ(シソ科)、ヒヨドリジョウゴ、ハダカホオズキ(ナス科)、キヌタソウ、アカネ、クソカズラ(アカネ科)、スイカズラ(スイカズラ科)、カラスウリ、キカラスウリ(ウリ科)、ツリガネニンジン、ツルニンジン、キキョウ(キキョウ科)、キッコウハグマ、ノコンギク、リュウノウギク、オケラ、ヤブタバコ、サジガクキソウ、ヒヨドリバナ、サケバヒヨドバナ、センボリヤリ、ヤクシソウ、ヤブタラビコ、コウヤボウキ、ホソバノコウヤボウキ、フキ(キク科)、チヂミザサ、ヌカヒキ(イネ科)カンスゲ、ナキリスゲ(カヤツリグサ科)ナルコユリ、ホウチャクソウ、ヤブカンゾウ、ノカンゾウ、ヤマユリ、ジノヒゲ、ギンラン、キンラン、シュンラン、オオバノトンボソウ(ユリ科)、イチリンソウ、ニリンソウ(キンボウゲ科)ウラシマソウ(サトイモ科)、アカシヨウマ(ユキノシ



奥之院の山相

ガマズミ、オオカメノキ、コマキ、ヤブテマリ、ニシキウツギ、タニウツギ(スイカズラ科)、カヤ(イチイ科)、モミ、アカマツ(マツ科)、ホオノキ(モクレン科)、コアカツ(イラクサ科)、カンアオイ、ランヨウアオイ(ウマノスズクサ科)、ハンショウズル、クサボタン(キンポウゲ科)、ムラサキマムシクサ(サトイモ科)、ツクバネソウ、シオデ、エンレイソウ(ユリ科)、オニドコロ(ヤマノイモ科)、ヤマトリカブト、オウレン、ヤマシヤクヤク(キンポウゲ科)、ヤマキケンマ、ヤマブキソウ(ケシ科)、ヤマブキ(バラ科)、タチツボスミレ、マルバスミレ(スミレ科)、リンドウ、フデリンドウ、ハルリンドウ、ツルリンドウ(リンドウ科)、テイカズラ(キョウチクトウ科)、オオカモメズル(カガイモ科)、ルリソウ、ヤマリソウ(ムラサキ科)、テンニンソウ、シモバシラ、オドリコソウ(シソ科)、ハシリドコロ(ナス科)、クガイソウ(ゴマノハグサ科)、キスタソウ、ヤマムグラ、オオバノヤエムグラ、ホソバヨツバムグラ(アカネ科)、オミナエシ、オトコエシ(オミナエシ科)、ソバナ、キキョウ、ツルニンジン(キキョウ科)、ノブキ、キッコウハグマ、モミジガサ、メダカゾウ、シロヨメナ、オケラ、ガクビソウ、リュウノウギク、タイアザミ、カシワバハグマ、ヤブレガサ、ヤマボケチ、ヒメヒゴダイ(キク科)、ナキリスゲ(カヤツリグサ科)、セキシヨウ(サトイモ科)、ホウチャクソウ、ミヤマナルコユリ、チゴユリ、ヤブカンゾウ、シヨウジ

ヨウバカマ、ヤブラン、オオバジャノヒゲ、マイズルソウ、ユキザサ、ヤマジホトトギス、ホトトギス、ヤマホトトギス(ユリ科)、キツネノカミソリ、ナツズイセン(ヒガンバナ科)、シヤガ(アヤメ科)、クマガエソウ、アツモリソウ、オオバノトンボソウ(ラン科)、サンカクヅル(ブドウ科)

(四) 亜高山帯の植物

本町唯一の亜高山である七面山は、亜寒帯の様相を示して、若干の高山植物が見られる。山頂の代表的植物をあげる。



コ オ ニ ユ リ

ミヤマハンノキ、ダケカンバ、アカカンバ(カバノキ科)、ムラサキツリバナ(ニシキ科)、ミネカエデ(カエデ科)、マシグレ(スイカズラ科)、オシラビソ、トウヒ、サワラ、シラビソ、コメツガ(マメ科)、ナナカマド(バラ科)、マユミ(ニシキギ科)、トチノキ(トチノキ科)、アセビ、ネデキ、チチブドウダン(ツツジ科)、イワガラミ、ノリウツギ(ユキノシタ科)、ミヤマエンレイソウ、ツバメオモト、コバイケイソウ、キヌガサソウ、マイブルソウ、オオバユキザサ、コオニユリ(ユリ科)、バイカオウレン、ミヤマオダマキ(キンポウゲ科)、ツルツゲ(モチノキ科)、ハリブキ(ウコギ科)、イワカガミ(イワウメ科)、ヒメシデシヤジン、イワシヤジン(キキョウ科)、カニコウモリ、ヤハズヒゴタイ、ヤマハハコ、キオン(キク

科)、キンスゲ(カヤツリグサ科)、ミヤマウズラ(ラン科)、オサバグサ(ケシ科)

七面山頂付近一帯の針葉樹林は伐採され、その跡にはシラビソの稚樹が一帯に生えている。

(五) 植物の方言

スベリヒューイハヒズル、ナズナーペンペンダサ、カキドオシーカントリソウ、ホトケノザーサンガイグサ、ヨモギーモチグサ、ヒメムカシヨモギーテツドウグサ、エノコロクサーネコジャラシ、シロツメグサークローバー、ノイバラーノバラ、コナラトナラ、コウゾーカゾ、アブラチャンーツサ、ヤマノイモージネシヨ、ウツギーウノハナ、カマツカウシコロシ、ヌルデーカツノキ、キツターフユヅタ、ハリギリーセンノキ、ネムノキーネブタ、リュウノウギクーノギク、アカメガシワーアカメンボ、アセビーアセミ、シャガーハツカケババア、イヌガヤーヒヨウブ、ウラジロモミーモミソ、ウリハグカエデーウリカワ、オオバコーゲールッパ、カヤツリグサーハナビグサ、ガマツミーヨシズ、ヨスズ、カラスノエンドウーシビビイ、キブシーメンブシ、クズーグズバ、クロモジークロモンド、クワノ実ーカミズサワグルミーカワグルミ、サワシバーシロシデ、シモツケーヤマコマバナシユンランージジイババア、オシヤカサンーハナ、ズミーコナシ、タマアジサイーサワフサギ、ダンコウバイーズサ、チドリノキーサワシバ、ヤマシバ、ドクウツギーナベワリ、トリカブトーカブトバナ、ハナイカダーマッコ、ヒメシヤラーサルスベリ、オミナエシーアワバナ、オトコエシー



七面山の高山植物コメツガ、シラビソ、マユミ

コマバナ、ホタルブクロローバツカン、マムシグサーヘビノマクラ、アケビーアクビ、ミツバアケビーモチアケビ、ミツバツツジームラサキツツジ、ヤシヤブシーアズマ、ヤブカンゾウーピユウピユウ、ヤマブドウーオオエビヤマボウシーヤマッカ、ヤマボクチーウラジロ、ユリーヨル、リョウブーギョウブ

(六) 有毒植物

ヤマトリカブト(キンボウゲ科)、ハシリドコロ(ナス科)、ヒガンバナ(ヒガンバナ科)、ドクウツギ(ドクウツギ科)

(七) 各地区の植物

ア、下山の植物

上沢寺と本国寺には、ともに国の天然記念物指定のオハツキイチョウがある。これは葉に実のつく変わったイチヨウで、全国的に有名である。くわしくは別の項で述べる。下山地区には、暖地性の植物は数が少ない。

ナンテン、アカメガシワ、ネムノキは、随処に見られる暖地性植物である。

下山で特に注目すべきは、一の宮加茂神社のヒサカキの群落とサカキの自生である。サカキの自生は本町ではここより外は見当らない貴重な存在である。その他の暖地性植物では、ヤブツバキ、ネムノキ、ダンコウバイ、テイカズラ、アラカシ、シラカシなどがある。

イ、下山から杉山を経て身延山までの植物

裏山道の代表的な植物をあげると、クサギ、バッコヤナギ、ハナイカダナンテン、ヤブサンザシ、センニソウ、ハンショウヅル、ボタンヅル、コボタンヅル、ミズキ、ガマツミ、コマツナギ、フサザクラ、ニワトコ、ミツマタ、イロハカエデ、ケンボナシ、テイカズラ、ヒトリシズカ、フデリンドウ、イカリソウ、ヤブラン、シュンラン、ギンラン、ゲンノシヨウコカワラナデシコ、シモツケ、ホシダ、クマワラビ、ゲシゲシシダ、タチシ

ノブ、オオバイ、モトソウ、ウラジロ、ウスヒメワラビ、クマワラビなどである。

ウ、寺平付近の植物

ここにはタブノキ(クスノキ科)目通り幹囲四・六〇メートルの巨木があったが、昭和四十一年九月の台風二十六号による土砂崩れで流出してしまった。寺平の南に面した地域には、ヤブツバキ、アオキ、シラカシ、ニガキ、ムクノキ、ツルグミ、ヤブソテツなどの暖地性植物が混生している。

エ、身延山の植物

身延山は中腹から下は暖帯で上は温帯に属している。その境は六五〇メートルぐらいである。天然固有の林相の場合は、下方は暖帯の代表であるカシ類のシラカシ、アラカシ、ウラジログシを主とする常緑広葉樹林で、上方はブナ、イヌブナ、シデ類、カエデ類の落葉広葉樹林この両者は接しているのが普通であるが、スギ、ヒノキなどの植林のため天然の林相が失われている。スギは本山の南から西へとさらに裏山から奥の院へかけてうっそうとして茂っている。総門や山門裏の杉並木は実に見事な大木で、霊山身延の尊厳をつくり出している。この中には目通り幹囲六・五〇メートルの巨樹もある。身延山杉林中最も代表的なものは千本杉である。本数は約二六〇本、材積石高の多いことで東洋一の美林といわれ、県指定の天然記念物となっている。

身延山は斜面を南に向けた日だまりなので、暖地性植物が多く分布している。山門裏にはヤブミヨウガの小群落が目につき、シダ類ではハカタシダ、ベニシダ、ウスヒメワラビ、ナンカイイチシダがあり、シヤガは大群落をつくっている。オオバイノモトソウ、オオツヅラフジ、キッコウハグマ、ナキリスゲなどが生育している。西谷側にはハゼノキ、サネカズラ、ヤブミヨウガ、ケンボナシなどが少々目につく。また栽植されたイトザクラ(シダレザクラ)が数多くあって、何れも見事なもので花の季節はまことに美しい。また随処にカラスウリが生育している。山門裏、男坂、本山

裏などのスギ林下や西谷の諸処に暖地性のタブの木が見られる。

本山周辺は、アオキ、ナンテン、アラカシ、シラカシ、タブノキ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹がある。クスノキやフクノキの大樹もある。栽植されているものには、シキザクラ、オオバボダイジュ、西谷には、コウヨウザン、シナアブラギリ、イトザクラなどがあげられる。

オ、久遠寺から三光堂を経て奥の院までの植物

タブノキ、ムラサキシキブ、アオキ、エノキ、ヤブミヨウガ、アラカシ、コクサギ、コバノガマズミ、ヤブコウジ(群落)、シヤガ(大群落)、タマアジサイ、ベニバナボロギク、イロハカエデ、シキミ、モウソウチク、ウリノキ、ガガイモ、ウバユリ、キヌタソウ、ムカゴイラクサ、アブラザサ、キイチゴ、ミネカエデ、クマシデ、チョウウジタデ、ツルマキ、ミツデカエデ、リョウブ、ヒメシヤラ、キヌタソウ、ブナ、サンカイズル、センナリホホヅキ、ヒメジョオンなどが頂上近くにある。

カ、西谷から願満堂追分を経て奥の院までの植物

ケンボナシ、ハゼノキ、アオキ、アカメガシワ、フユザンシヨウ、アラカシ、シラカシ、サネカズラ、テイガズラ、コンテリギ、ベニシダ、ヒメワラビ、ウラジロ、ツルグミ、ツルシキミ、コバノガマズミ、ヤブムラサキ、コクサギ、キブシ、ダンコウバイ、アブラチャン、アワブキ、ウリノキ、ヒイラギ、クマシデ、ヤブレガサ、ナガバノコウヤボウキ、クジャクシダ、ヤマニガナ、オトギリソウ、キヌタソウ、イナモリソウ、ウラジログシ、ウワミズザクラ、ヤマシバカエデ、ミヤマハハソなどの植物が目につき、暖帯のカシと温帯のブナとが接するのは、願満堂の上部あたりである。ここでは、シラカシ、アラカシ、ウラジログシがブナやイヌブナと混生している。登るにしたがって、ブナ、イヌブナが多くなり、リョウブ、アワブキ、フサザクラ、ウリノキ、シラキ、サワシバ、ミヤマハハソ、ケヤキ、ヒメシヤラ、イタヤカエデ、ホソエカエデ、ムカゴイラクサ、ミツバフウロウ、テンニンソウ、マツカゼソウ、カジカエデ、カントウマムシグサ、キハダ、モミ、ヤマザクラ、イロハモミジ、マルバウツギ、クロモ



エンレイソウ (延齢草)

シ、ヤマボウシ、ソバナ、ミツカエデ、チヂミザサ、ハクウンボク、メグスリノキ、キョダキシダ、ナガバノスミレサイシン途中モミの原木が目につく、感井坊の下でエンレイソ

ウがあり、続いて登ると、イヌツゲ、アセビ、コバノトリネコ、ニセアカシヤ、シナノキ、オニツルウメモドキ、アカシデ、リョウブ、ナツツバキなどの樹木があり、千本杉の下方にイヌブナの大木が目につく。またわずかにウラジロガシ、テラカシも生育している。

奥の院への道の南側はスギ、ヒノキの人工林となっているが北側は落葉広葉樹林である。アブラチャン、ウリハダカエデ、ミツカエデ、エンコウカエデ、オオモミジ、カジカエデ、フサザクラ、エゴノキ、ケハリギリ、ヤシヤブシ、サワシバ、クマシデ、ホオノキ、コバノトリネコ、カマツカヤマハンノキなどがあり、ブナが多く純林となつてるところもある。山頂のスギ、ヒノキ林の下にはスズタケ、ミヤマザサが茂っている。思親閣付近には日蓮聖人植えの巨樹が四本あるが、うち一本は枯れ、他の二本も枝の一部が枯れている。思親閣の前にボダイジュ二本が植えてある。

キ、大城川流域と安倍峠の植物

門野本妙寺には県指定の天然記念物のイチヨウがあり、湯平八幡社境内には、天然記念物級のツクバネガシの巨木と若木があつて本町では珍しいものである。またこの木にはサジランやヘラシダ、ノキシノブなどが着生している。本町では数少ないコモチシダが大城近くと身延南谷に数株見られチコグサも路傍に生えている。大城周辺ではシユロの野生化が目立



コモチシダ

ち、最近見られるようになったアフリカ原産のベニバナボロキクがこのあたりから安倍峠の中腹にまで及んでいる。ヤクシソウも多い地帯である。古谷城上方には本県唯一の自生と思われるオオクジャクシダや、南部町の戸栗川上流に見られる葉の表と裏とが同じような緑色をしているリョウメンシダなどがある。

安倍峠の上部は自然林が残されているが、下部



コウゾ

コウゾ、アセビ、ウラジロノキ、マルバアオダモ、シラカシ、ウリノキ、ホオノキ、アワブキ、アカシデ、エゴノキ、コンテリギ、イヌツゲ、ウワミズザクラ、コアジサイ、クロモジ、ハクウンボク、クリ、コミネカ

エデ、メグスリノキ、トチノキ、ヒメシヤラ、オニグルミ、サワグルミ、カツラ、ミヤマキ、ハダ、ケウツギ、フジウツギ、エンコウカエデ、ミツカエデ、チドリノキ、ウリノキ、カマツカ、コバノトリネコ、オオカメノキ、モミ、サルトルイバラ、バライチゴ、モミジイチゴなどで草本ではムカゴイラクサ、フジアザミ、アキノキリンソウ、コメナモミ、アメリカセンダングサ、エゴマ、ヘビノネゴザ、リュノウギク、ノコンギク、フジテンニンソウ、アカネ、ヨツバヒヨドリ、ゲンノショウコ、ホソエノアザミ、ツルニンジン、オトコヘシ、カンスゲ、キンミヅヒキ、オオバユキザサ、ヌカビキ、フクオウソウ、ヤマハハコなどで、珍しいものには岩壁に生えているイワナンテン、イワユキノシタ、カイイワカガミ、湿岩に生えているものではイワタバコ、特に貴重なシラヒゲソウがある。つる木ではアケビ、ミツバアケビ、フジ、テイカズラ、サルナシ、ミヤママタタビなどでシダ類では、イヌワラビ、フユノハナワラビ、イワガネゼンマイ、リュウメンシダ、キョタキシダ、ハリガネワラビ、ミヤマイタチシダ、ヤマイヌワラビ、岩壁に着生するエヒラシダは稀なものである。安倍峠の中腹から頂上へかけては標高千メートルあたりからイヌブナ、ブナの混生林に入りヒメシヤラの相当太い木が目につく、落葉広葉樹林では、オオカメノキ、ミズナラ、コバノトリネコ、ナンキンナナカマド、ウリハダカエデ、アオハダ、キハダ、コミネカエデ、ハウチワカエデ、アヅキナシ、コシアブラミヤマシグレ、アセビ、ヤマアジサイ、リョウブ、タンナサワフタギ、ホオノキ、ノリウツギ、ミヤマアオダモ、ヒトツバカエデ、ヒカゲツツジ、トウゴクミツバツツジ、チチブドウダン、ゴヨウツツジ、ホツツジ、ウスギヨウラクなどのツツジ類も多い。頂上近くにはブナを主とした林であるが、ツガ、ウラジロモミなどが混生している。林下にはスズダケ、ミヤコザサ、トウゲシバなどが生えている。草本では、オオバユキササ、キンレイカ、ヤマイワカガミ、テバコモミジガサ、ヤブレガサ、シラネセンキュウ、マイヅルソウ、ヂガバチソウ、シンガシラ、シラネワラビがある。

ク、大島、和田、樋之上周辺の植物

この地域には暖地性の植物が多い。ヒサカキ、アオキ、イヌツゲなど多く小群落をつくっている。特に注目すべきウラジロの群落やマンリョウの群落がある。目につく植物をあげると、アカメガシワ、クリ、ハナイカダ、エゴノキ、クサアジサイ、モチツツジ、イヌシデ、アカシデ、ヤブレガサ、ゼンマイ、コゴメウツギ、メダケ、ヤダケ、カンアオイ、カギガタアオイなどがある。埜には県指定天然記念物のヤマボウシとタカオモミジ(イロハカエデ)の大樹がある。

ケ、角打から大崩を経て榛草里までの植物

アラカシ、シラカシが沢に沿って大崩まで達している。途中の坂道の上下には常緑広葉樹が多い。ツバキ、ヒサカキ、アラカシ、シラカシにまじってダンコウバイ、ネムノキ、アブラチャン、コナラ、キブシ、バイカウツギ、タマアジサイ、岩壁に暖地性のマメヅタが着生している。草本ではウバユリ、アカネ、ヒヨドリバナ、ミヅタマソウ、タケニグサ、センニンソウ、オミナエシ、ヒヨドリジョウゴ、シオデ、ノブドウ、ルリソウ、ソバナ、キキョウ、ガククビソウ、コウヤボウキ、タイアザミ、リュウノウギク、ホウチャクソウ、ヤブカンゾウ、ヤマユリ、ヤブラン、ホトトギスなどで沢の岩間にセキショウが生育している。峠付近では樹皮のなめらかなリョウブが目につく、イヌシデ、カゴノキ、クロモジ、サンショウ、イヌザンショウ、マルバウツギ、アカマツ、イヌツゲ、ウリカエデ、タラノキ、ミヅキ、ハナイカダ、モチツツジ、コバノガマズミ、ガマズミ、アケビ、ヤマザクラなどあまり大木はない。

榛草里にはツバキの大きい木が八株一列に栽植されており、また栽植と思われるシキミとエドヒガンザクラの大樹がある。小枝の先に長さ約一〇センチメートル総状の花序をつける。ウワミズザクラが路傍にある。渓谷の対岸にナンジャモンジャノキといわれているムクノキの大木がある。このあたりにはアラカシ、シラガシ、アカマツ、イヌシデ、アカシデが多い。

(ハ) 帰化植物

外国から渡来して、その分布を拡大し、一時的もしくは、永続的に野生化した植物で、本町においても数多く帰化植物が見られる。これらの植物は低地に多く分布しているが近年急に山麓や亜高山帯にまで見られるようになった。最近見られるようになったアフリカ原産の、ベニバナボロギクが、本町では大城から大城川に沿って安倍峠の中腹まで見られ、また本山西谷上部から三光堂下まで及んでいる。大河内地区、下山地区ではまだ見られないが、まもなく本町全域に見られよう。帰化植物は路傍や荒地などに多く見られ越年性のキク科植物が多い。

オニノゲンシ(キク科) ヨーロッパ原産、ノボロギク(キク科) ヨーロッパ原産、明治初年、ベニバナボロギク(キク科) アフリカ原産、ヒメジヨオン(キク科) 北アメリカ原産、明治初年、ヒメムカシヨモギ(キク科) 北アメリカ原産明治初年、アレチノギク(キク科) 北アメリカ原産、オオアレチノギク(キク科) ブラジル原産、オオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科) ヨーロッパ原産、タチイヌノフグリ(ゴマノハグサ科) ヨーロッパ原産、センナリホオツキ(ナス科) アメリカ原産、エゴマ(シソ科) 中国原産、マツヨイグサ(アカバナ科) チリ原産、オオマツヨイグサ(アカバナ科) 北アメリカ原産、アレチマツヨイグサ(アカバナ科) アメリカ原産、シロツメグサ(マメ科) ヨーロッパ原産、江戸時代、ムラサキツメグサ(マメ科) ヨーロッパ原産、明治初年、マメグンバイナツナ(アブラナ科) 北アメリカ原産、アカザ(アカザ科) 中国原産、ソハカズラ(タデ科) ヨーロッパ原産、アメリカセンザングサ(キク科) 北アメリカ原産

二、北限の植物

富士川に沿って北上した暖地性植物がわが身延町に数多く分布している。これは身延町が温暖な地であることを物語っている。次に本町に自生

する南方系暖地植物は、タブノキ、シラカシ、アラカシ、ウロジロガシ、シキミ、サカキ、ヒサカキ、ヤビツバキ、ヒイラギ、アカメガシワ、ハゼノキ、マンリョウ、ツルグミ、サネカズラ、テイカズラ、ツヅラフジ、ナンナン、フェザンシヨウ、クサアジサイ、モチツツジ、シャガ、カギガタアオイ、ササユリ、ヤブミヨウガ、カニクサ、イワガネソウ、オオイタチンダ、ナンカイイタチンダ、ハカタシダ、ウラジロ、ベニシダ、マメヅタ、ウスヒメワラビ、ヒメワラビ、オオバノイノモトソウ、ホンダ、サジラン、ランダ、テバコモミジガサ、キッコウハグマ、イワナンナンなどがあげられる。

これらの暖地性植物の中には、身延がその北限となっているものと、シラカシ、アラカシ、テイカカズラ、ヒメワラビ、ホンダなどのようになお北上して甲府の北まで達している寒さに強い植物もある。

(一) 本町を北限とする植物

タブノキ(クスノキ科)

常緑広葉の高木でタモともいわれている木である。六月頃黄緑色の花が咲き、七月末頃黒紫色に実が熟す。生長は早く大木となる。太平洋岸などの暖地に多く、本町では、波木井神之平八幡神社境内に見事な大樹がある。また、本山の周辺と三光堂に若木がある。タブノキの最北限のものとして貴重である。

シキミ(モクレン科)

常緑の小高木で四月下旬淡黄色の花をつける。漢字で榊と書くように仏前に供える木で有名である。妙石坊・願満堂・椿草里・粟倉・門野など各所の墓地周辺に栽植されている。自生は少ないが山門裏や願満堂の上など各所に見られる。

アオキ(ミズキ科)

暖地性常緑広葉の低木、観賞用に庭に多く栽植されている。自生地は大島・樋之上・和田・角打・丸滝・身延山山門裏などである。

ヒイラギ(モクセイ科)

暖地性の常緑小高木、本州関東以西、四国、九州に分布し、観賞用によく栽植されている。老壯樹はよく葉のとげがなくなり、尖卵形の葉となつて別の植物のように見える。本町では、自生をあまり見かけないが、追分感井坊の下あたりにわずかに見られるだけである。

サネカヅラ(モクレン科)

つる性の暖地性植物で雌雄異株、八月頃淡黄色の花をつける。液果は紅熟して美しい。時に観賞用として栽植される。自生はわずかに西谷に見ることが出来る。

ハゼ(ウルシ科)

暖地性の落葉高木、葉の付き方もウルシのように奇数羽状複葉である。秋に美しく紅葉しヤマハゼによく似ている。ハゼノキは全株無毛である。男坂と西谷で見られる。

ササユリ(ユリ科)

ユリ科の多年草で本州中部以西、四国、九州の暖地の林中に生ずる。高さ七〇センチメートルぐらいで、葉は無毛でなめらか、わずかに白い粉がある。七月頃淡紅色のテッポウユリ型の花が三個くらい横向に咲く。本町最南端の横根あたりが北限であろう。

ヤブミヨウガ(ツユクサ科)

暖地性の多年生の草本、高さ五〇―六〇センチメートル円錐花序に小花をつける。果実は藍色の小球形をしている。陰湿な樹下に多く群落をつくる。山門裏、本師堂西側の杉の下に小群落をつくっている。

コモチンダ(シンガシラ科)

暖地性の大型常緑シダ、時に葉の表面に芽がでるのでこの名がある。本町では大城入口と身延南谷で発見されているのみで貴重である。

ベニンダ(オンダ科)

暖地性の常緑シダ、全国的に少ないもので珍品である。山門裏に少しある。

サジラン(ウラボシ科)

名前だけでは、ラン科と間違えられるがやはり暖地性の常緑のシダである。主として山林中の岩や樹幹に着生する。湯平で見かけたがおそらく北限であろう。

ヘラシダ(ウラボシ科)

サジランに似た暖地性のシダ、山林中の湿地や陰湿な斜面に生ずる。湯平に若干ある。

イワガネソウ(イノモトソウ科)

常緑羽状の暖地性のシダ、イワガネゼンマイに似ているが側脈が結合している。暖地山林中に生育する。本町では山門裏に少しある。

(二) 分布の北限に近いもの

ヒサカキ(ツバキ科) 妙石坊、下山一之宮。マンリョウ(ヤブコウジ科) 和田接心庵。ウラジロ(ウラジロ科) 大島・西谷・杉山。オオイタチシダ(オンダ科) 身延山男坂。マメヅタ(ウラボシ科) 波木井・大崩道

(三) 身延を越えて北上しているもの

ムクノキ(ユリ科) 甘露門下、椿草里、下山。アカメガンソウ(トウダイソウ科) 下山上栗倉。ツヅラフジ(ツヅラフジ科) 甘露門下。カキカタアオイ(ウマノスズクサ科) 埜。ナンテン(メギ科) 身延町全域。ウスヒメワラビ(オンダ科) 感井坊下。イワヒメワラビ(イノモトソウ科) 西谷

(四) 分布上注目すべきもの

ヒメシヤラ(ツバキ科) 七面山、奥之院、安倍峠に多く分布している。樹皮が淡赤褐色でなめらかである。七面山から箱根を結ぶ線がその北限であるので、身延山はその北限である。
ミヤマウコギ(ウコギ科) 追分感井坊下のミヤマウコギはおそらくその北限であろう。

三、群生植物とその分布状況

生育条件の同じ状態を好む植物が、同一の個所にむらがつてはえることを群落という。

(一) シ ヤ ガ

シヤガはアヤメ科の植物で、林下陰湿地に群生する常緑多年草である。高さは五〇―六〇センチメートルで、根茎は浅く横走し細長い匍枝を出して繁殖する。葉は袴状に二列互生の剣状、尖頭、革質、鮮緑色で光沢がある。五月頃葉間に一茎を出して総状互生に分枝し、各枝に白紫碧色の花を二―三花開く、花の直径は五―六センチメートルである。花のない季節でも葉が美しい。身延山山門裏より男坂にかけて一面に大群落を形成し、また、本山裏から三光堂までの杉の下草として広大な地域に及んでいる。

(二) ヤ ブ コ ウ ジ

ヤブコウジはヤブコウジ科の常緑の小灌木で時に観賞用としても庭園に栽培される。冬季の赤熟した果実が美しい。高さは一〇―二〇センチメートルで葉は短柄互生で長楕円形、緑で鋸歯があり普通梢に一―二層をなして集り輪葉のように見える。地下茎を引き繁殖するので群落をつくる。小群落は随処にあるが、三光堂下の参道のわきの群落は見事である。

(三) ヤ マ ブ キ

イバラ科の落葉灌木、広く庭園に栽培されヤエヤマブキ、シロヤマブキ、キクザキヤマブキなど変種がある。幹は高さ二メートル位で叢生し、枝は細くわん曲する。晩春初夏の頃黄色五瓣花を多数つける。「七重八重花は咲けどもやまぶきの実の一つだになきぞかなしき」と歌に詠まれているが、果実は数箇宿存萼内に座している。総門山之坊の上方山中に群落がある。

ある。

(四) ウ ラ ジ ロ



ウ ラ ジ ロ

暖国の山地に生ずる大形の常緑多年生のシダで、通常乾燥地に大群落をつくる。根茎は太い針金状で長く横走する。葉柄は茶褐色で硬く光沢がある。葉は葉柄頂で二つに分れ二葉となり羽状に全裂又は深裂する。上面は光沢ある緑色で下面は白色でこの名がある。暖地性シダのため本町ではその分布は稀であるが大和小学校下に小群落がある。この外和田峠、西谷、杉山にわずかに生育している。

(五) ヤ ブ ミ ヨ ウ ガ

ツユクサ科に属しているが、暖地の陰地に生ずる多年草みょうがに似ているが同じ科ではない。山門裏と本師堂西側の杉林の下に小群落がある。

四、特記すべき植物

オハツキイチョウ (イチヨウ科)

葉に実のつく珍しいイチヨウである。イチヨウは雌雄異株で上沢寺、本國寺のイチヨウは雌株で八木沢のは雄株である。上沢寺のオハツキイチョウの葉上結実が正常種子七に対して三である。葉上結実の事実が明治二十四年白井光太郎博士によって学会に発表され、同年藤井健次郎博士によつ

て木の形態的意義が明らかになつたもので、三株とも国の天然記念物の指定をうけている。上沢寺のオハツキイチョウは樹高二七メートル目通り幹囲六・三メートル、八木沢のは葉上薬(葉の上に花粉を貯えておく袋)がある。

タブノキ(クスノキ科)

暖地性の常緑の高大木で、本州、四国、九州の主として海岸に多く、五月黄緑色の花を開き黒紫色に熟し、果柄は赤色をおびている。別名をイヌグス、タマグスともいい、本地方では方言でタマまたはタモとも呼んでいる。タブノキは富士川に沿って北上し、富沢町、南部町に多く、標高四〇〇メートルまでの地に分布している。身延町におけるタブノキの分布を見ると、久遠寺三門裏に幹囲一・四メートルのものが一本あり、本山の杉林の中に小木が点在している。西谷の坊の境内にも諸処に見られ、三光堂、妙石坊にも小木がある。波木井神之平八幡社境内のタブノキは目通り幹囲二・七メートル、樹高約七二メートルの樹勢旺盛な大木で自然の樹形を呈し、分布北限としてきわめて貴重である。

カシ類(ブナ科)

暖地性の常緑高木でシラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシが分布しているがツクバネガシはわずかである。シラカシ、アラカシは耐寒性が強いため町全域の山腹まで分布している。ウロジロガシは下山区には少ない。身延山では妙石坊から願満堂までの間にとくに多く、上部まで達している。

ヒサカキ(ツバキ科)

常緑の小高木で暖帯各地に見られるサカキに似た植物である。多数の枝、葉を生じ、枝葉ともに毛がない。葉は有柄、互生、楕円形で先がとがっている。雌雄異株で三、四月頃淡黄色の小花をつける。果実は球形、黒紫色である。大島・樋之上・角打に多く自生している。とくに下山一ノ宮境内の小群落は分布上珍らしい。

ムクノキ(ニレ科)

暖性地の落葉高木で、エノキに似ている。葉の上面がざらつく、葉は幅広い卵状の楕円形で鋭い鋸歯がある。果実は球形に熟し甘味がある。ムクドリが好んでこれを食するのでこの名がある。甘露門傍、椿草里溪谷に大樹がある。

ヤマボウシ(ミズキ科)

落葉小高木、葉は楕円形か卵状円形で先がとがっている。葉のへりは波をうっている。六、七月頃短枝の先に白い苞が四枚開き、花のようであるが、花はこの中心に二〇―三〇が頭状につく。果実は球形・集合果・肉質で熟すと赤くなる。径は一〇―二〇ミリメートルでイチゴの実に似ている。笹のヤマボウシは県指定の天然記念物として有名である。

シキザクラ(バラ科)

コヒガンザクラの一種で四季咲性の強いものである。返り咲き現象ではなく四季花をつける。久遠寺本堂前の池の両端にあるのがこれである。

コウヨウザン(スギ科)

中国原産の常緑針葉樹で広葉杉と書く。スギよりカヤに似た葉をしている。総門前の石垣にあるのは相当大樹でこの外、信行道場の西と竜雲寺の境内にそれぞれ一本ずつある。

シナアブラギリ(トウダイグサ科)

中国原産の落葉高木で、実から桐油をとるため栽培されたもので信行道場、西方に植えてある。

アカメカシワ(トウダイグサ科)

暖帯より温帯南部にわたって分布する落葉高木で若芽も葉柄が赤色で美しい。雌雄異株で果実はブドウ状につき黒熟する。本町では平地全域で見られる。とくに上栗倉の高地にあることは珍らしい。

クロツリバナ(ニシキギ科)

ムラサキツリバナともいう。落葉低木で、葉は長円形または卵形で質は薄く、しわが一面に出ている。鋸歯は細く浅い。葉の前後がとがり対生している。花は細柄の先につりさがるのはツリバナと同様である。花の色が

暗紫色なのでこの名がある。七面山頂上付近でみかける。

ダケカンバ (カバノキ科)

ソウシカンバともいう。シラカンバに似た落葉高木で、樹皮はシラカンバのような白さではなく灰白色か淡褐色である。葉は三角状卵形あるいは広卵形、基部は通常円形で表は緑でつやがあり、裏の色は表より淡い、へりに歯がある。七面山頂で多く見られる。

ヨグソミネバリ (カバノキ科)

落葉高木、葉はややシラカンバに似ている。樹皮は灰褐色で枝の皮をはげば独特の臭気をはなつ。名とは違うサロメチールのようなさざやかな匂いがある。ブナと混生林をつくっている。

ブナ (ブナ科)

落葉高木、幹は直立で高さ三〇メートルにもなり、樹径は約一・五メートル以上の大樹となる。樹皮は灰色でなめらかである。よく枝分かれしてしげる。身延山・安倍峠・七面山に相当の大木がある。

カツラ (カツラ科)

落葉大高木、高さ二七メートル径一・三メートルに達し時に数幹に分岐し枝には短枝が多い。葉は細長柄、対生、広卵形またはハート形、やや鈍頭で鋸歯がある。雌雄異株で五月頃葉より早く苞に包まれた花を葉液に単生する。安倍峠中腹の沢筋には多い。身延町役場と大野トンネルの中間の道路傍に一株ある。

タンナサワフタギ (ハイノキ科)

落葉大低木、本州 (関東以西)



イワナンテン

・四国・九州・朝鮮済州島に産し、葉は倒卵形、先はとがっている。若枝の先に円錐の花序が出る。サワフタギより枝が上方に出る。身延山に多く自生しているが、安倍峠にもある。

イワナンテン (ツツジ科)

ツツジの仲間であるが葉がナンテンに似ている。本州関東以西の山地に分布している。早川町以南の岩場で見られる。七面山の表参道、古谷城上方の岩壁にある。

イワユキノシタ (ユキノシタ科)

常緑多年生の小草木、東海地方や四国の深山にまれに産する珍品、古谷城上方の道南の岩壁、大城川の岩壁に生えている。

シラヒゲソウ (ユキノシタ科)

本州の中部・西部・四国・九州の暖地に生えているが、極めて稀な珍しい植物で、県下でも数少ないものである。

コバイケイソウ (ユリ科)



コバイケイソウ

登山者の間ではよく知られている。葉が厚ぼったく背の高い穂状の白い花をつける植物である。七面山のお池のほとりに小群落がある。名前のコバイケイソウのウは小さい、

バイケイは梅^{ばい}で梅の花に似た蕙 (日本のシランに近い中国のランの一種) から来た名だといわれている。

ツバメオモト (ユリ科)

全体の形がオモトに似ている。ツバメが飛来する頃花をつけるので、こ

の名があると思われる。葉は根ぎわから五―七枚の鮮緑色の厚味のあるものをつけ、花は柄の上に二―八個まばらにつける。七面山で見かける。

ヤマトリカブト(キンボウゲ科)

花の形が烏帽子えぼしのようなものである。この名がつけられたと思う。花は紫色で美しいが、猛毒である。七面山には処々に生えているが、お池のほとりに群落がある。

その他注目すべき植物としては身延山・和田樋之上周辺・大城川上流に見られる暖地性植物があるが、これは北限の植物の項にゆずる。

本町教育委員会指定の植物園(下部町地内望月榮別荘の庭園)には二百数十種の植物がある。(七編五章九節六ノ(二)参照)

第二節 身延町周辺の動物

地域の地勢や、気候風土の変化は、植物分布の状況を千態万様ならしめているのでこれら植物の実、また、それに寄食する昆虫等の好餌が随所に求められるのはもちろん、鳥類における営巢の適地、構巢の材料、獣類の棲む適地、洞窟等が容易に求められる。地域の自然と、つねに深い相互関連をもって分布するものである。

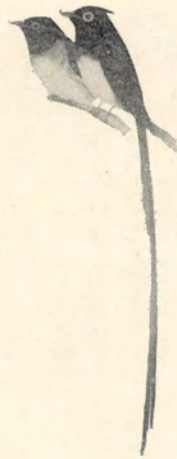
身延は全面積の八二パーセント余りが林野で占められその深く刻まれた大小無数の溪谷があり、低地の暖帯性から、亜高山帯までの間に感受性の鋭敏な動物が特有の適応性を発揮し、多種類の動物が自然的要素と平衡を保持しながら生息、又は渡来して繁殖している。

一、鳥類

(一) 夏鳥



アカショウビン



三光鳥



キジ

は、ツバメをはじめとしホトトギス、アカショウビン、ブッポウソウ、カッコー、ジュウイチ、ツツドリ、サンコウチョウ、ヨタカ、コムクドリなどである。

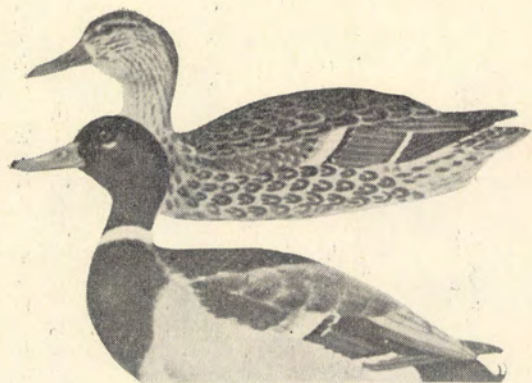
身延町は、ブッポウソウ(仏法僧)渡来生息地として、全国三カ所と共に、天然記念物に指定された、全国的に著名な繁殖地である。

ブッポウソウは、「ブッポウソウ」と、鳴かず、ただゲゲとかギャギャと鳴き、「ブッポウソウ」と、鳴く鳥はコノハズクであり、ブッポウソウはわが国に渡来する夏鳥中美麗な点において、優位を占めており、渡来数が極めて少なく、カナブン・コガネムシ・タマムシ・ハンノキハムシ等の害虫を捕食する有益鳥である。

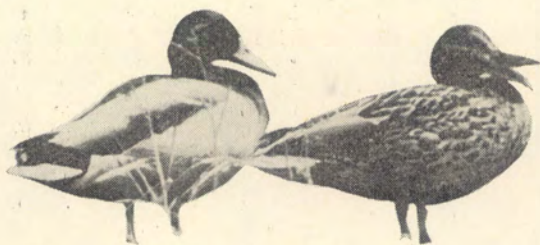
(二) 留 鳥

周年同一地域に生息し、季節的移動をしないものでキジ・ヤマドリ・スズメ・カラス・カワセミ等である。キジは年々減少し、現在三カ年を限度とし一切の狩猟を禁止する休猟区が町内に逐次設定され、休猟区内にはキジを放鳥し保護と増殖につとめている。
キジは、昭和二十二年に日本鳥類学会より国鳥に指定された。

(三) 冬 鳥



マ ガ モ



コ ガ モ

北海道・千島・シベリア等の北方寒冷の地で繁殖し越冬のため秋季に渡来し、春季北方に去るものでガン・カモ・ツグミ・オンドリ・ジョウビタキ・クイナ・ウズラ等がある。

(四) 漂 鳥

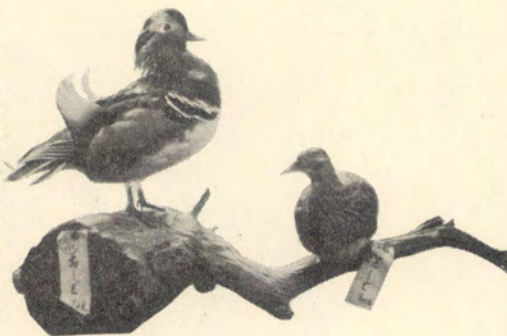
繁殖地と越冬地を異にする鳥、たとえば高山・深山に繁殖し、冬を村落地方に過す、ウグイス・ミソサザイ・ルリビタキ・カケス・コノハズク・シジュウカラ・ヒバリ・ヒヨドリ・フクロロー・モズ・トビ・クマタカ・ヤマガラ・アカケラ類等本地域に出現する漂鳥は、五一種に及んでいる。

(五) 旅 鳥

本邦遙か、以北で繁殖し、赤道直下若しくは以南の南半球で越冬するため秋は南に、春は北に本地域を通過するシギ・チドリの類コムシクイ・ムギマキ等で本地域の旅鳥は六種である。

二、身延町内分布鳥類別表

目	鳥 科 名	繁殖地				摘 要
		無鳥	鳥	鳥	鳥	
(一) 燕 雀 科	目	殖	無	鳥	鳥	
1	ハシブトカラス	○	○			
2	ハシボソカラス	○	○			



オ シ ド リ

126	イカルチドリ	○	○	○	○	○	より早期に繁殖する。海外に移動しない
125	コチドリ	○	○	○	○	○	富士川流域の河原に多く繁殖する。
124	ムナグロ						四月下旬頃北方に移動の際富士川沿岸に出現する。
(一) 千鳥科							
123	ヤマシギ		○				うす暗い杉櫓等の林内湿地に生息、数少ない。
122	タシギ		○				渡来数少ない。
121	イソシギ		○				富士川流域に生息するも数少ない。
120	アオシギ		○				他のシギと異なり主として河川の源流に近い所に生息している。
(一三) 鶺鴒科							
119	アオバト	○	○				七面山にかなり繁殖している。
118	キジバト	○	○				
(一二) 鳩科							
117	オンドリ		○				他の鳩類に混じって夜間富士川流域に出現する。
116	カルカモ		○				
115	コガモ		○				
114	マガモ		○				
(一一) 雁鴨科							
113	ミゾゴイ	○	○				
112	ゴイサギ	○	○				
(一〇) 鶺鴒科							
111	サシバ	○	○				梟科鳥類中アオバズけとともに夏鳥である。
110	トビ	○	○				
109	ツミ	○	○				

三、哺乳類

134	ヤマドリ	○	○				
133	キジ	○	○				
132	コジュケイ	○	○				
131	ウズラ			○			秋、冬季現われる。
(一六) 雉科							
130	クイナ			○			近年渡来数激減している。
129	ヒクイナ	○	○				河岸、水田等に少数ながら姿を現わす。
(一五) 秧鶴科							
128	コリカモメ			○			水田上を飛びながら小魚その他水棲昆虫を認めるや急降下して啄食する。台風等の海上の荒れたとき富士川をさかのぼり姿を現すことがある。
127	コアジサシ	○	○				
(一四) 鷗科							

鳥類の生息上好適条件をもつ本地域は、その生活に共通条件を有する獣類の分布の上にも理想的な天地である。

したがって獣類においても、その種類は比較的豊富であって、学術上貴重な本邦特有の動物ヤマネ・カモシカ等が生息するほか必然的に生息するものとして、イノシシ・シカ・ツキノワグマ・アナグマ・タヌキ・サル・ハクビシン・ムササビ・モモンガ・キツネ・イタチ・テン・モグラ・ハツカネズミ・カワネズミ・ノウサギ・コウモリ・リス・シマリス等で、イノシシ・クマ・ノウサギ・サル・ハクビシンは山野から田畑に出没して農林産物に多大の被害をあたえる。

(一) カモシカは身延町の飛地一、九八二・四メートルの七面山、安倍

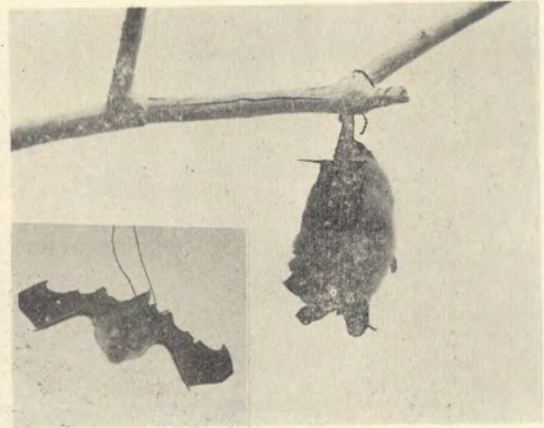
(二) ハクビシンは、昭和二十九年三月身延町樋の上地内で発見された

の实を食べ生息している。および豆科の草木類を好んで食べ、秋冬にはブナ・クリ・ナラ等



カモシカ

少の一途を辿っているため大正九年に天然記念物に指定され、さらに昭和三十年に特別天然記念物に指定された珍獣で、菊科



コウモリ

峠一带と東方の五宗山、三ツ石一带の針葉樹林、草木帯付近の山岳中の岩石地帯及び断崖に好んで生息する草食性、日本特有の動物でヒツジに似てよく肥え、体高六〇センチメートルぐらいで、体長は一メートルぐらい、尾は短かく、頭に二本の角がある。全身灰黒色で、毛はやわらかく、密生している。性質はきわめておとなしく、四・五月頃一仔を産むも産数が少なく、また高山の懸崖に住む関係で、雪崩のため墜落死、圧死等の災厄により年々減少の一途を辿っているため、この保護のため大正九年に天然記念物に指定され、さらに昭和三十年に特別天然記念物に指定された珍獣で、菊科

晩秋から春さきまでの間、土中・岩石のき裂・石垣等でおもに越冬、ときおり草屋根等でも越冬し、春さきより晩秋までの間、山野から人家の周辺に生息する蛇類中マムシは、マムシ科で卵胎生である。游蛇科にシマヘビ・アオダイショウ・マヤカガシ・ヒバカリ・ジムグリ・シロマダラの六種があり、シロマダラは稀有の種類であって、体長約五〇センチメートル、打紐のごとく、頭胴に淡白色の地に三八条の黒褐色の帯斑がある。

カナヘビ科にカナヘビがあり、トカゲに似た尾の細長いものであるが、

四、爬虫類

のが最初であるが実際には昭和二十四年頃から生息していた。珍獣で台湾以外で見出されたのは初めてである。どうして町内に分布したか、それが人為的分布か自然分布か動物界におけるなぞの一つであり、近年繁殖し西八代郡一带(富士川東)の山野や町内相又地内でも見られ、初秋から初冬の間、落花生・柿の実・ミミズ等を採食する。ジャコウ猫科動物である。

(三) ヤマネは、淡かっ色で背面に一本の黒い線がある。本邦特有の小獣で一科一種のヤマネ科で、体長七センチメートル位、尾の長さは五センチメートル内外で体つきはネズミに似ているが、尾はふさ状で低山帯から、亜高山帯の森林内の樹洞、巣箱等の中にマリののように丸くなって冬眠する。コン虫や果実を食物とする。



ヤマ

一般にトカゲと誤認されている。トカゲはトカゲ科である。

五、両生類

爬虫類と同様越冬するがその期間は多少長く、初冬から春さきまででヤマアカガエル・ニホンアカガエル・トノサマガエル・シエレーゲルアオガエル・ツチガエル・カジカガエル・モリアオガエル・ウシガエル等はアカガエル科に属し、アマガエル科にニホンアマガエル・ヒキガエル科にニホンヒキガエル等があり、この三科は無尾目で、サンショウウオ科のハコネサンショウウオ、イモリ科のイモリ等が生息している。

モリアオガエル



モリアオガエル



サンショウウオ

は数多く繁殖しその分布は町内全域に及び、特異な産卵習性をもつこと
で有名なカエルで
体長は雄七センチ
メートル、雌は九
センチメートルぐ
らいで体色は緑色
または暗緑色で、
赤かつ色な不規則
なはん紋がある。

四月から六月に大きい泡状の卵塊を、沼、池等の水辺の樹上や草むらの上に産む、ふ化したおたまじやくしは、卵塊の中でしばらく発育したのち、水中に落ちて成長する。水かきはよく発達す、吸盤は大きく、吸着力は他のカエルより強力である。

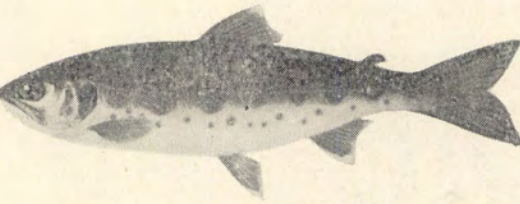
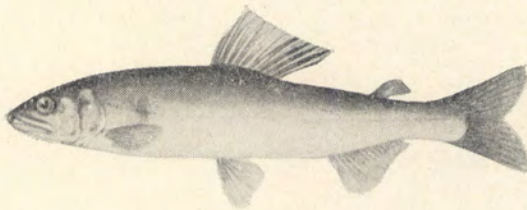
サンショウウオ科のハコネサンショウウオは、溪谷上流に棲み、単に

「サンショウウオ」と呼ばれ町内では相又川、椿川、桑柄沢川、大倉沢の上流の清流に生息し薬用として珍重されている。
イモリ科のイモリは沼沢地に住むが雨天の場合は藪の上に登って昆虫を捕食する寄習がある。

カジカガエルは、普通カジカと呼ばれておるが、鰈(カジカ)はさかなであり本種は河鹿蛙と呼ぶのが正しいのである。

各河川の清流の石の上で「クーイツ、クーイツ」と可憐な鳴声でよく知られている。ウシガエルは、食用にするために、大正十年頃アメリカから輸入されたカエルで、町内の沼でときおり見ることがあり、鳴声は小牛に似ており、体は大きくニホンヒキガエルの二倍位である。

六、魚類



(上) ア ユ (下) ヤ マ メ

富士川を中心これに注ぐ町内各河川は、魚族の豊かさを誇っていたが、昭和十七年五月に塩之沢、波木井間に発電用えん堤の築造、森林の過伐等により各河川の水量が減り魚類が棲みにくくなり更に、近年台風による河川の氾らん、異常な建設ブームによる富士川の砂利採取で年間を通じ水が濁り、魚類は激減している。

富士川・相又川・波木

井川・大城川・御持川・桑柄沢川・その他町内の小河川にアユ・ウグイ・ヤマメ・アブラハヤ・フナ・コイ・モロコ・オイカワ・カジカ・ホウテク・メダカ・スナモグリ・ドジョウ・ウナギ・ナマズ等が主なものでライギヨも時おり見ることができている。

相又川、波木井川には年々アユが放流され、更にこの二川にはヒメマス、ニジマスを年数回漁業団体等が放流し釣り人を楽しませている。

七、甲殻類



モクズガニ

町内大小無数の河川から沢に、短尾目の節足動物で、堅いからおおわれた頭胸部と、その下に折りたたまれた腹部からなるカニは、歩脚五対あり、第一対の先端は、はさみになり、種類が少なく、大小はあるが色や、形において大差はない。

町内にはサワガニ・モクズガニ・アメリカザリガニ等が水辺の石の下や、土中に穴を掘り生息し一般にカニと呼ばれるのはサワガニである。

モクズガニは、身延を北限とするカニで、サワガニより数倍大きく、昭和十七年頃までには容易に捕えることができたが近年は魚類同様な条件で激減し、時おり見かけることができるのみである。モクズガニは、全身灰黒色で、歩脚五対は灰黒色の短毛に覆われており、第一対の歩脚つけねには一センチメートルから二センチメートル位の毛が密生している。

八、昆虫類

季節を象徴する、蝶類・蟬類・トンボ類・カブト虫類さらにはバッタ・コウロギ類は非常に多種類で詳述できないが、例をあげれば次のとおりである。

(一) 蝶の類

ア、アゲハチョウ科 一二種

クロアゲハ・ミヤマカラ
スアゲハ・カラスアゲハ・オ
ナガアゲハ・アゲハチョウ・
キアゲハ・モンキアゲハ・ア
オスアゲハ・ヒメギフチ
ヨウ・ウスバシロチョウ・ギ
フチョウ等一二種で、食草
からして北限と思われる蝶
に、モンキアゲハ・アオス
ジアゲハ・ギフチョウがあ
り、ギフチョウは隣町の南
部町が北限とされていたが
町内身延山林内にすみ雌
は、幼虫の食草であるカン
アオイを探して産卵する。

イ、シロチョウ科 七種

ヤマキチョウ・モンシロチョウ・ツマキチョウ・スジグロスジチョウ・
ツマダロキチョウ・モンキチョウ・スジボソヤマキチョウ・
ウ、ヤダラチョウ科 一種

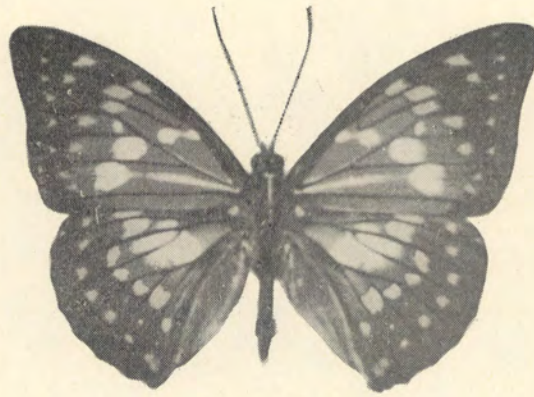


ギフチョウ

アザギマダラは一属一種の大型の優美な蝶で、あまり羽ばたかないで流れるように滑空し、羽はビニール様で特徴があり町内では大盆地内でよく見られる。

エ、タテハチヨウ科 三二種

オオムラサキ・コムラサキ・サカハチヨウ・スミナガシ・ルリタテハ・



キ サ ラ ム オ

ゴマダラチヨウ・アカタテハ・ヒメアカタテハ・キベリタテハ・クジャクチヨウ・キタテハ・ヒオドシチヨウ・シートテハ・エルタテハ・ミスジチヨウ・コムミスジ・オオミスジ・イチモンジチヨウ・オオイチモンジ・ホシミスジ・フタスジチヨウ・ヒヨウモンモドキ・オオウラギンヒヨウモン・ヒヨウモンチヨウ・ウラギンヒヨウモン・クモガタヒヨウモン・ミドリヒヨウモン・メスグロヒヨウモン・アサマイチモンジ・オオウラギンズジヒヨウモン・ツマグロヒヨウ

モン等三二種で、オオムラサキは国蝶でその大きな羽とその優雅さにおいては国蝶に、はずかしからぬ蝶で、幼虫はエノキの葉を食草に、成虫はクヌギ、ニレなどの樹液に飛来する。

現在国蝶として七十五円の郵便切手となりその優美の姿とともに一般に親しまれている。

タテハチヨウ科の蝶は、羽を立てると羽裏は樹皮に似ており優美さに欠けるが羽表はいずれも美しく、湿地に多く柳の葉を食草としているコムラサキの雄は、羽表から紫の幻想的な光を放ち、また優雅な鳥クジャクの羽

根によく羽表が似ているクジャクチヨウや、羽表が猛獣の豹の模様によく似ている。ヒヨウモンドキをはじめ豹のつく蝶も九種ほど生息し、タテハチヨウ科の蝶は低地から高地までの広範囲に及び他の蝶に比較し成虫越冬するものが多い。

オ、ジャノメチヨウ科 一二種

キマダラヒカゲ・ジャノメチヨウ・ヒメジャノメ・コジャノメ・クロヒカゲヒメウラジャノメ稀有なものでツマジロウラジャノメ・ウラナミジャノメ・クロヒカゲモドキ・ヒメキマダラヒカゲ・キマダラモドキ・ヒメヒカゲ等が分布している。

カ、シジミチヨウ科 二〇種

アカシジミ・ウラナミアカシジミ・ゴマシジミ・オオゴマシジミ・オオミドリシジミ・ミドリシジミ・ウラギンシジミ・オナガシジミ・シジミチヨウ・トラフシジミ・コツバメ・ムラサキシジミ・ベニシジミ・ルリシジミ・ヤマトシジミ・ゴイシジミ・ウラナミシジミ・ツバメシジミ・数少ないものにフジミドリシジミ・ウラジロミドリシジミ等二〇種が分布している。

キ、セセリチヨウ科 一一種

ミヤマセセリ・ヒメキマダラセセリ・チャバネセセリ・キバネセセリ・クロセセリ・アオバセセリ・ホソバセセリ・アカセセリ・ダイミヨウセセリ・ミヤマチヨウバネセセリ秋季西南に向って渡りをするイチモンジセセリ等である。

ク、テングチヨウ科 一

テングチヨウは一科一種で発生は年一回六月ごろである。



ク マ ゼ エ

(二) 蟬の類

蟬の類では次の一目、一科、一二種があげられる。

名	蟬	翅	科	目	鳴	声	呼	名	生	息	地
1	ハ	ル	ゼ	ミ							「ギーン、ギーン、ギーン」と鳴き松林に多いので「マツゼミ」と呼ばれている。
2	エ	ゾ	ハ	ル	ゼ	ミ					山地にすみ「ヨーギン、ヨーギンヒヒーン」と鳴き地方により「ミヨーギン」とも呼ばれている。
3	ニ	イ	ニ	イ	ゼ	ミ					「ニイー、ニイー」と鳴くので鳴声よりその名が生れており、小型の蟬で至るところにすんでおり、蟬類中最も多く見られる。
4	ア	ブ	ラ	ゼ	ミ						「テンブラ」をあげるとき、油の煮たつ音に鳴声似ているので、この名が生れたといわれている。
5	ヒ	グ	ラ	シ							一般には「カナ、カナ」または、キン、キンと鳴くといわれている。
6	エ	ゾ	ゼ	ミ							北海道に非常に多い蟬で、大木の森で「ギイーツ」と変化のない大声で長時間鳴き続ける翅の透明な大型の蟬である。
7	コ	エ	ゾ	ゼ	ミ						エゾゼミに非常によく似ているが小型で、標高千メートル以上の高山に分布している。
8	ミ	ン	ミ	ン	ゼ	ミ					鳴声よりその名が生れている。「ミーン、ミーン」と五・六声連呼する蟬で非常に多い。
9	ツ	ク	ツ	ク	ボ	ウ	シ				鳴声からその名が生れている。「ホーシ」が先で「ツク、ツク」があとであるがこれを繰り返すので「ツクツクボウシ」と言われているのである。
10	ク	マ	ゼ	ミ							黒い大型の蟬で体色からその名が生れている。町内には稀で、鳴声は「シン、シン」と聴ける。
11	チ	ッ	チ	ゼ	ミ						本邦産蟬類中最も小型で分布数も少ない。初秋の頃松林にて「チッ、チッ、チッ、チッ」と四連呼する。

(三) トンボの類

ヤンマのなかまでは、オニヤンマ・コシボソヤンマ・コオニヤンマ等が分布し、トンボのなかまには、シオカラトンボ・コシアキトンボ・ショウジョウトンボ・ナツアカネ・アキアカネ・シオヤトンボ・アオハダトンボ等が分布の主なるものである。

(四) カブト虫の類

カブトムシ・カナブン・アオカナブン・クロカナブン・シロテンハナムグリ・コガネムシ・ヒメコガネ・ドウガネブイブイ等がコガネムシ科の主なものである。

ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタ・ヒラタクワガタ・アカアシクワガタ・コクワガタ等がクワガタムシ科で、ゾウムシ科にコクゾウムシ・コフキゾウムシ・ヒメシロコブゾウムシ・オトシブミ科にトロハマキチヨッキリ・オトシブミ等が主なるもので、コマダラカミキリ・シロスジカミキリ・ヤマカミキリ・トラフカミキリ・キボシカミキリ等はカミキリムシ科で農作物に多大の被害を与えている。

(五) バッタ、コウロギの類

バッタ科にシヨウリヨウバッタ・キチキチバッタ・カワラバッタ・イナゴ・トノサマバッタ等が分布している。

コウロギ科にスズムシ・マツムシ・クサヒバリ・マダラスズ・ミツカドコウロギ・エンマコウロギ・カナタタキ・オカメコウロギ等が主なものである。

カマドウ科にマダラカマドウマ・キリギリス科にキリギリス・ウマオイムシ・クツワムシ・ツユムシ・セスジツユムシ等で、カマキリ科にオオカマキリ・カマキリ・コカマキリ・ハラビロカマキリ・ナナフシ科にナナフシ、ケラ科にケラ、ゴキブリ科にチャバネゴキブリ・クロバネゴキブリ等が分布している主なもの、クツワムシは本町が生息の北限である。

(六) ホタルの類

ヘイケボタル・ゲンジボタル・オバボタル等ホタル科に三種分布しているが、近年田畑の農薬使用等のため激減の一端をたどっている。

(七) ハチの類

スズメバチ科にキアシナガバチ・ホソアシナガバチ・クロスズメバチ・スズメバチ等が主なるもので、ミツバチ科には、ミツバチ・クマバチ・クロマルハナバチ・トラマルハナバチ・シガバチ科にクロアナバチ・ジガネバチ等が生息している。

(八) アリの類

アリ科にムネアカオオアリ・トビイロケアリ・アズマオオズアカアリ・クロヤマアリ・クロオオアリ等が主なるものである。

(九) 水虫の類

ガムシ科にガムシ・コガムシ・ミズスマシ科にオオミズスマシ・ミズスマシ・ゲンゴロウ科にグロゲンゴロウ・ゲンゴロウ・タガメ科にタガメ・コオイムシ・アメンボ科にアメンボ・オオアメンボ・ヒメアメンボ・タイコウチ科にタイコウチ・ミズカマキリ・ミズムシ科にコミズムシ等が水虫の主なるものである。

(一〇) その他

カ・アブ・ハエ・カゲロウ・ムカデ・ハサミムシ等については省略した。